

---

# Tears of Memories

夜斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Tears of Memories

### 【Nコード】

N2931Q

### 【作者名】

夜斗

### 【あらすじ】

幻想郷の外れにある、誰も知らないゴミ捨て場。  
そこには朽ち果てた者を修繕する優しい人間がいた。  
今日も誰かが落とした思い出を、針と糸とで結びつける。  
いつか、自分の思い出へ辿り着くことを夢見ながら……

少女の名は『糸柳あてな』

幻想郷に棄てられた、思い出の修理人。

今回は特に時間軸の固定は無し。  
オリジナルキャラメインのお話です。

## 序章 雨と少女とぬいぐるみ（前書き）

それは、少女の遠い過去の記憶。

降り注ぐ雨、涙を流す少女、横たわるぬいぐるみ。

去りゆく少女の背中を、彼はただ見送ることしかできなかった。

## 序章 雨と少女とぬいぐるみ

「ごめんね……」

少女は、泣いていた。

雨の降るゴミ捨て場の真ん中で、少女は降りしきる雨に負けず劣らずの大泣きをしていた。

少女の足元には、ボロボロに崩れたクマのぬいぐるみが横たわっていた。

元々は白クマのぬいぐるみだったはずなのに、土で汚れ、雨に濡れ、そして片腕を失くしていて。

「ごめんね……ごめんね……」

ひたすら謝り続ける少女。

ぬいぐるみは、当然黙ったままで何も言わない。

ただ少女が大粒の涙を流すのを、静かに見つめるだけ。

答えなくても、答えられなかったから。

どれくらい、泣き続けていたのだろうか。

気がつくと、少女のそばに傘をさした二人の人物が現れた。

崩れたぬいぐるみもよく知っている人物。

少女の母親と父親だった。

両親は泣きじやくる少女の頭を優しく撫でて慰めるが、泣き止む気配はなかった。

少女は傘の中に入ると、両親に背中を押されながらゆっくりと歩き出した。

途中、何度も何度も振り返って手を伸ばすが、その手は父親に引かれて結局届かなかった。

少女は二度と振り返ることなく、ゴミ捨て場を去っていった。

その日は一日中、雨も、少女の涙も、止まなかった。

## 序章 雨と少女とぬいぐるみ（後書き）

### 東方二次創作第二弾

個人的な見解が多く含まれているので、嫌悪などを感じさせてしまった場合はすいません；

ご指摘、ご感想などございましたらいつでも自由に書き込んでください。

## 第一話 最果ての裁縫師（前書き）

幻想郷の最果てにあるゴミ捨て場に、一人の少女が住んでいた。  
朽ち果てたぬいぐるみを集めて修理する心優しい少女。

今日も彼女は、彼らの声を頼りに棄てられた思い出を探していた。



## 第一話 最果ての裁縫師

幻想郷の最果てにある、誰も知らないゴミ捨て場。そこにゴミ山と格闘する一人の少女の姿があった。

若草色のローブに白いエプロン。

腰まで伸びた青い髪を背中中の辺りで一つに束ねた少女は、頬を黒くしながら顔をあげると、

「おつかしいなあ……？ たしかに聞こえたんだけど……？」

やや高めの声でつぶやいてから、少女は躊躇なくゴミ山に両手を突っ込んだ。

異臭を放つ怪しげな布つきれ。

何だかよくわからない機械の部品の欠片。

あれでもない、これでもないと言いつつながら掴んだゴミを辺りに放り捨ててまき散らす。

傍から見たら迷惑そのものである。

ご近所のクラスだってここまでまき散らすことはないだろうに。

「ぶつはあ！？ ダメだ！ わかんない！ 一体どこお……？」

ゴミ捨て場全体に響くような大声をあげてから、少女は息を整え瞳を閉じた。

苦シイよ……ダレか、たスけて……

風の音にかき消されてしまいそうなほどか細い、ささやくような声が聞こえた。

「聞こえた！ 場所は……！？」

ほど近い場所に積もったゴミ山。

声は、そこから聞こえてきた。

「今すぐ助けるよ！ ちょっと待ってて！」

するとローブのポケットから一枚の符を取り出す。

魔法の力がこもった術符。スベルカード

少女がありつたけの集中力を注ぎこむと、符は強い光を放ち、全身に光の奔流を描く。

「少し危ないけど、今すぐ助けるからね！」

そして右手をゴミ山に向けると、光の奔流が眩しいほどの輝きを放つ。

「うりやああああー！」

気合いの入った掛け声とともに、光はゴミ山を一直線に貫き派手な爆発を起こした。

しかし、威力が強すぎてゴミ山の辺りは真っ白な煙に包まれて何も見えなくなってしまった。

「ゲホッ、ゲッホ……ケホッ……っ、強すぎたなあ……？」

その白煙を思わず吸い込んだ少女は、苦しそうに咳き込んで涙目になる。

右手ではたと払いながらゴミ山の煙を払う。

すると、無残に吹き飛ばされたゴミ山だった物体がそこかしこに広がっていた。

「あ、あちゃあ……だ、大丈夫？」

少女がゴミ山だった場所に向かって問いかける。

そこにはもちろん誰もいない。

だが……

し、死又かト思っタ……

先ほどもさらにか弱い声が聞こえた。

少女が声のした場所を覗くと、そこには耳の千切れたウサギのぬいぐるみが横たわっていた。

「へへへ……ご、ごめんねえ？……っしょと」

少女はすぐさまウサギのぬいぐるみのそばへ飛び込んで、それを大切そうに拾い上げる。

よく見ると、耳以外にも所々壊れていた。

「でももう大丈夫！　ボクがキミを助けてあげるから！」

……君八？

ぬいぐるみは片方だけの目で少女を見上げた。

「ボク？　ボクは『糸柳あてな』っていうの。よろしくね」

少女、あてなはぬいぐるみを優しく抱きかかえるとゴミ捨て場を後にした。

## 第一話 最果ての裁縫師（後書き）

東方二次創作第二弾。

新たなオリジナルキャラ、『糸柳あてな』の活躍や如何に？

前作同様、毎日一話ずつの更新を目指して頑張ります！

ご感想、ご指摘などお待ちしております。

## 第二話 魔法の糸と針（前書き）

小屋に戻ると、あてなは早速作業を開始する。

千切れた耳や、失くした目を丁寧に縫いつけて……完成。

ぬいぐるみはあてなに礼を述べると、小屋を旅立っていった。

## 第二話 魔法の糸と針

「それじゃ、早速始めますか！」

自分の小屋へ帰ると、あてなは作業用の机の上に先ほどのウサギのぬいぐるみを静かに置いた。

始める……？ 何ヲ？

「キミの修理だよ。ええつと」

あてなは机の引き出しをこそごとと探ると、手芸用の綿と糸を取り出した。

「そして、お裁縫にはこれがないとね」

エプロンのポケットから取り出したのは、銀色の小さな針だった。

細い針の穴に糸を通し、あつという間に準備が整った。

「さてさて……？」

あてなは改めてぬいぐるみの状態を確認する。

千切れかけの耳に、綿が漏れ出た横腹。

腕は問題無し。足も、大丈夫。

それと、右目のボタンがないから新しいボタンも必要だ。

別の引き出しを開けて今度は黒い四つ穴のボタンを取り出す。

「これでよし。んじゃ、ちよつと我慢してね……」

最初は新しい綿を入れてあげよう。

ぬいぐるみの横腹を少し切って、漏れ出た綿を少しずつ取り出す。

お腹のあたりがぺちゃんこになった。

取りだした古い綿はほとんど変色していて使い物にならなかったため処分する。

それを捨てると、今度は新しい綿を詰めて糸で縫う。

綿の抜けたぺしゃんこのぬいぐるみは、あつという間にふかふかにふくらんだ。

「次は、っと……」

続けて千切れかけの耳を直す。

針少しずつ、慎重に縫っていく。

「痛くない？ だいじょぶ？」

うん。

ほどなくして耳が綺麗に繋がった。

最後に目の修理。

四つ穴のボタンに糸を通すと、かつて目の合った場所に新しいボタンを縫いつけた。

そしてゆっくりとぬいぐるみを離し、

「……どう？ 見えるようになった？」

恐る恐る訊ねた。

すごい……みえる！ ミえるよ！

か弱い声は、途端に元気を取り戻して明るい声になった。

それを聞いてあてなは、

「えへへ。よかったね！」

満面の笑みになった。

それから、一度ぬいぐるみを優しく撫でてあげた。

するとぬいぐるみがゆっくりと立ち上がって、

アテナさん、ありがとウ。

ぺこりとお辞儀をして礼を述べた。

あてなは照れ臭そうに頬をかきながら、

「ああいや、キミの声が聞こえたからボクは助けたただだよ。……

キミ。これからどうするの？」

あてなは訊ねた。

するとぬいぐるみはどこか遠い場所を見つめて、

かエル。ボクをさがしてる女ノ子を探スの。

小さな声で答えた。

「……そつか。うん。わかった」

あてなはぬいぐるみを抱えると、玄関へ向かった。

ありがとう。それじゃ、ボクは行くね。

「うん。気をつけて、ね」

そしてウサギのぬいぐるみは、よたよたとおぼつかない足取りで小屋を後にした。

その後ろ姿を、あてなは悲しそうに見つめて、

「健気だなあ……」

そっと、涙を拭った。



## 第二話 魔法の糸と針（後書き）

お裁縫、というより手芸ですね。

最近の人はお裁縫できるのでしょいか？

ちなみに自分は……ミシンなら使えますけど手縫いは出来ません；

### 第三話 雨の日の来訪者（前書き）

魔法の森に存在する小さな洋館。

大雨の中、二人の少女が雨宿りに訪れた。

一人はよく知る友。

もう一人は……見知らぬ人間だった。

### 第三話 雨の日の来訪者

「ああゝあ。今日はツイてないぜ……」

魔法の森に存在する、大きな洋館。

一人の少女が、灰色の空を恨めしそうに見上げながらポツリとつぶやいた。

「せっかく珍しいキノコ見つけたから魔法の実験しようとしたのに、この雨でパーだぜ……」

外はバケツをひっくり返したような大雨。

少女は小さく舌打ちした。

びしょ濡れの黒いローブ、魔女が被るような三角の帽子から流れる金の髪も雫が滴るほどに濡れている。

そんなびしょびしょの少女のやや離れた場所から、

「それで、どうしてあなたがここににいるのかしら？ 魔理沙」

もう一人、少女が現れた。

同じく金色の髪に濃紺のローブ。

まるで西洋人形のような、とても綺麗な容姿をしていた。

「雨宿りぐらいいいだろ？ 減るもんじゃなし」

魔理沙と呼ばれた少女は絨毯の上でお構いなしにローブを絞った。当然の如く、水が滴り落ちる。

「……せめて玄関でやってくれないかしら？」

「わりいわりい」

少女はため息ついた。

すると、どこからともなく小さな人形が現れ魔理沙のいた場所の掃除を始めた。

「いいのよ上海。それぐらい魔理沙にやらせるわ」

人形は少女を見上げる。

まるで鏡を見ているかのように、その人形は少女そっくりの顔をしていた。

「アリス。コレワタシノシゴト。マリサジャヤクニタタナイ」

「んな！？ おいおいアタシは人形以下ってか？」

「……一理あるわね」

「ねえよッ！？」

人形が絨毯を丁寧に拭いているのを見ながら、アリスはふうと再びため息ついた。

「まあ、この雨じゃしかたないわね。食事も用意するから今日は泊っていったら？」

「おゝ助かるぜ。こんな体のまま帰ったら風邪ひいちゃうしな。んじゃ、早速シャワー借りるぜ」

……ごくり。

「ん？ なんだ今のごくりって？」

「なんでもないわ」

そして魔理沙はびしょ濡れのローブをぱたぱたさせながらバスルームへと向かった。

「……私もお風呂入ろうかしら」

「アリス。オフロニハマリサガハイツタゾ？」

「だからこそよ」

「……？」

よだれを腕で拭うアリスを、人形は不思議そうに見上げた。

風呂場へ足を向けたその瞬間、ふとアリスは何かの気配を感じ取って振り返った。

「……？」

気配は外からだった。

特に気配を消そうとせず、雨の中をふらふらと動いている。それはだんだんとこちらに近づいてきて、

ドン！ ドン！

玄関から大きな音が響いた。

誰かが外からノックしている。

「……………」

もちろん、今日は来客の予定などない。

来るとしたら森に迷いこんだ人間だけだろう。

「せっかくのチャンスなのに……。仕方ないわね」

アリスが目配せすると、人形がふわりと飛んで玄関のドアを開ける。

「ドチラサマ？」

ドアの前には、ずぶぬれの少女がうずくまっていた。

若草色のローブに、一つに束ねた青い髪。

よろよると人形を見上げると、

「あ、雨宿りさせて……。くれませんか？」

今にも死にそうな声でそう言った。

「アリス。ドウスル？」

人形は困ったようになってアリスに向かって振り返る。

「……早く入れてあげなさい。それじゃ風邪をひいてしまうわ」

人形は少女の襟首を、猫でも掴むかのように容易く持ち上げると洋館の中へと戻っていった。

### 第三話 雨の日の来訪者（後書き）

風邪気味で調子悪いです……；  
皆さまもお気をつけてください。

#### 第四話 戸惑う人形（前書き）

お風呂上がりの少女は、あてなと名乗った。

見知らぬ顔に訝しげな顔をする魔理沙。

ほんの少しだけ興味がわいたアリス。

そしてあてなは、目の前で給仕する人形に興味津々だった。

## 第四話 戸惑う人形

「お風呂まで借りちゃってホント助かりましたあ」

タオルを髪に巻いた少女は、アリスに向かってお辞儀をする。

そんな少女を、アリスは冷たく見据えながら、

「あなた何者？ ただの人間……ではなさそうね」

釈然としない様子で言った。

横では魔理沙が頼杖つきながら同じように少女を見つめている。

「見たことないヤツだぜ。おまえどつから来たんだ？」

「えと、ここよりずっと北の方からです。ずうっと北の方」

「北？ ってえと妖怪の山あたりか？」

「いえ。もつと北です」

少女はきつぱりと言った。

それを聞いた魔理沙が訝しげな表情になる。

「はあ？ 山より北って何もないだろ？ あの山の向こうに何かあるなんて聞いたことないぜ……？」

「ゴミ捨て場しかありませんから……」

「ゴミ捨て場って……ますますわかんないぜ……？」

相手するのに疲れた魔理沙はそのままテーブルに顔を埋めた。

ただ、アリスだけは少女を見つめたままだった。

「……あなた、名前は？」

「糸柳あてな、って言います」

「そう。私はアリス。アリス・マーガトロイド。こっちは魔理沙」

「霧雨魔理沙だぜ」

突っ伏したまま手をひらひらさせながら魔理沙が答える。

すると、テーブルの上に小さな人形がちょこんと現れて少女に向かって軽く会釈してみた。

「オチャノヨウイガデキマシタ。ドウゾ」

人数分のカップを丁寧に置いてティーポットから紅茶を注ぐ。



給仕を終えると、人形は再び会釈してからテーブルを降りた。

その光景に、あてなは呆然としてしまつて、

「え？ 人形が喋った？ しかもお茶の用意まで？ え？ え？」

「んまあ初見じゃそういう反応だよな。慣れないとアリスの家つて下手なおばけ屋敷なんかよりよっぽど不気味だし」

「上海」

「い、今のは口がすべっただけなんだぜ？ だからナイフを突きつけるの止めて……」

「もう遅いからあなたも泊っていきなさい。多少怖くても、今日ぐらい我慢して頂戴」

「……………」

あてなは無言で人形を見つめていた。

そしておもむろに席を立つと、人形に向かって歩き出す。

「ナ、ナンデスカ……………」

しゃがみ込んで人形と同じ目線になると、あてなは再びまじまじと見つめる。

金色の髪。

大きなリボン。

くりくりした黒い瞳。

綺麗な紺色のローブ。

その全てを見つめてから、

「……………」

あてなは人形の頭をそつと撫でた。

「す、すげえ……………普通に触ってるぜ？」

「あなた、怖くないの？」

するとあてなは体をわなわなと震わせ、

「すつつつごく、可愛い……」

キラキラと瞳を輝かせながら答えた。

#### 第四話 戸惑う人形（後書き）

なぜか早くもお気に入り登録されているみたいで驚きました；  
それでも、読んでくれる人がいるってのはすごく嬉しいですね。  
これからも頑張ります。

## 第五話 お裁縫のお手前（前書き）

アリスの人形がとても気に入ったあてな。

一宿一飯のお礼として、彼女は人形の服を仕立てたいと願い出た。変わったヤツだと魔理沙は笑い、アリスは小さくため息をついた。

## 第五話 お裁縫のお手前

「ぬいぐるみの修繕……？」

アリスが目を細めてつぶやいた。

あてなは人形を抱えながら、

「そうです。棄てられたぬいぐるみや人形を助けて、直してあげるのがボクの役目なんです」

楽しそうに人形を撫でながら言った。

人形は若干窮屈そうな顔をしているように見えた。

「アリス。タスケテ」

「……それで、どうしてこの森に？」

人形にかまわずアリスは続けて訊ねた。

「里まで糸とか布を買いに行つて、近道しようとしたら迷っちゃつて……へへへ」

「ふうん……？」

あてなは相変わらず人形を愛でている。

さすがに可哀そうだと思つたのか、アリスは小さく手を躍らせ人形をこつそり操る。

「あ……」

すると、アテナの腕から人形がするりと抜けた。

心底残念そうになつたあてなを見てアリスは少し、ほんの少しだけ笑んだ。

「そんなに珍しいかしら？」

「うん！ こんなに幸せそうなお人形さん、初めて見たよ！」

「幸せ……そう？」

どういうことかしら、とアリスは訊ねる。

「そのお人形さん、笑ってるよ？」

「上海が？」

手元の人形に目を落とす。

そこにはいつもと変わらない、自分そっくりの無表情な顔があるだけ。

別に口元が緩んでいるわけもなく、ただただ無表情のまま。

「……私をからかっているのかしら？」

「ち、違うよ！ ホントに笑ってたよ？ ボクにはちゃんと笑ってくれたんだけどなあ……」

「あなた、には？」

するとあてなはうなずいて、

「さっきお茶をいれてくれたときに、ちょっとだけ……見間違いかそんなんじゃないか？」

「人形の気持ちかわかるってのか？」

「うん。わかるよ」

即答したあてなに、アリスと魔理沙は顔を見合わせた。

「……この上海は私の作った人形よ。もちろん人形だから心なんてものは無いわ。あるのは私が組み込んだ命令のみよ。この子が給仕をしたりしてくれるのは、私がそうするように作ったから」

「だから表情なんてのはないはずだぜ？　そこまで精巧な人形はアリスはまだ作ってないしな」

「でも、でも……」

納得のいかないような顔をして、あてなはうつむいてしまった。

「笑ったのになあ……。ぜったいぜったい笑ったのになあ……」

「おいおい、なにもそんな拗ねなくてもいいだろ……？」

気まずそうに魔理沙が言ったがあてなはしょんぼりしっ放し。

助けを求めるようにアリスに目をやった。

「……仕方ないわね」

先ほどと同じように軽く手を躍らせる。

アリスの手の中の人形がふわりと飛んで、あてなのそばへと舞い降りる。

「……………ムウ」

すぐさま抱きつかれる人形。

「か、可愛いなあ……。あ、そうだ！」

するとあてなは急に元気になって、アリスを見てから、

「その、雨宿りのお礼に、お人形さんの服を一着作ってあげたいんですけど、いいかな？」

「服？ この子のかしら」

「へえ〜？ そんなこともできるのか？」

「もちろん！ これでもボクは『裁縫をこなす程度の能力』の持ち主ですから！」

あてなはバンと胸を張って自信満々に答えた。

「それじゃ、どんな服にしましょうか？ 色とか形とか……。あ！

お人形さんの寸法測っていい？ それと、使ってないテーブルとか借りても！」

「わ、わかったから。少し落ち着きなさい」

テンションが最高潮のあてなに、アリスは少したじろいだ。

その様子を見て、魔理沙は面白そうにクスクスと笑っていた。

「水を得た魚ってか。面白いヤツだなアリス？」

「……ちよつと喧しいわ」

アリスは一度ため息をついてから、逃げ惑う人形と追いかけてこをはじめたあてなを見つめていた。

## 第五話 お裁縫のお手前（後書き）

本格的に風邪っぴきになりました；

声が枯れちゃって変な声になってます……w

執筆に支障はないけど、人と話すときがちよっと辛いです；

## 第六話 ドレスアップ（前書き）

アリスが目を覚ますと、あてなの姿がなかった。

彼女に預けた上海も見当たらず、不安になったアリスがその名を呼ぶと彼女から姿を見せた。

あてなの足元には上品で優雅な姿をした、自分そっくりの人形が寄り添っていた。



## 第六話 ドレスアップ

洋館の窓に差し込む一筋の光。

昨日の雨は完全上がり、雲一つない澄んだ青空が広がっていた。

「ふわぁ……おはようだぜアリス……」

「おはよう。……髪ぐらい直してから挨拶なさい魔理沙。頭爆発してるわよ」

「弾幕はパワー……なんだぜ……ふぁ……」

「やれやれ」

未だに寝ぼける魔理沙の背中をぐいぐい押して洗面所に押し込む。

そして席に着こうとテーブルに足を向けて、

「……あら？」

あてなの姿が見当たらない。

昨日、このテーブルを使うと言って夜中作業していたはずなのだが

……？

「上海？」

よく見ると人形も見当たらない。

と言っても、アリスの洋館には様々な人形が活動しているのだが、お気に入り上海だけが見つからない。

呼べばいつでも来るはずなのに。

……まさか？

「上海！」

強く呼んでも返事は無い。

声だけが虚しく洋館に響くだけ。

「じゃーん！出来たぁー！」

すると、何故か洗面所の方からあてなの声が聞こえてきた。

アリスが振り向いた瞬間、あてなの方から姿を見せた。

「あ、あなたそこで何を？」

ぼさぼさの青い髪に、隈の出来た目元。

あてなは頬をかきながら、

「この子のセッティングをば。ほら、おいで?」

奥の方に手招きした。

すると、あてなの足元に小さな人影が現れて、

「……上海?」

それはアリスの探していた人形だった。

だが、彼女の知っている人形とは全然違っていた。

フリルのついた群青色のドレス。

所々には美しい文様をあしらった刺繍。

金色の髪は、いつもより綺麗に整えられていて輝いている。

その姿はまるで、お伽話に出てくるお姫様のように上品で優雅だった。

「アリス。オハヨウゴザイマス」

挨拶をすると、とことこ歩いてアリスの腕に飛び込む。

「す、すごいね……あなた」

「えへへ。でもちょっと疲れちゃった……ふう」

疲れ切った様子のあてな。

今にもその場で眠ってしまいそうだった。

「待ってて。今朝食の用意をするから。それと……」

「ん?」

アリスは背を向けたまま、

「……素敵なドレス、ありがとう」

小さな声で、言った。

「お世話になりました! アリスさん」

丁寧に頭を下げられて、アリスは少し照れくさそうに、

「これぐらいのことで大袈裟ね。……でもまあ、私も楽しかったわ」

小さく微笑んだ。

遅れて魔理沙も洋館から姿を現して、

「ん、ん〜！ 朝日が気持ちいいんだぜ〜」

ウンと大きく伸びをした。

「それじゃ、ボクは失礼します！ …… またお邪魔してもいいかな？」

「え？ …… ええ、かまわないわ」

「えへへ。ありがと！」

そしてあてなは大きく手を振りながら、洋館を去っていった。

「…… ホント、変わったヤツだったな？」

「ええ。 …… そうね」

アリスは腕に抱えた人形を見つめながら、

「今度、何かお礼を考えておこうかしら」

「なんだ？ アリスもアイツが気に入ったのか？」

するとアリスはプイとそっぽを向いて、

「そんなんじゃないわ」

魔理沙に背を向けて洋館へと戻っていった。

## 第六話 ドレスアップ（後書き）

……文章力の無さに絶望してます；  
うん、なんかすごく安っぽい文章に見えるんだよねあ……

## 第七話 涙（前書き）

アリスの洋館から小屋へと帰るあてな。

無人の小屋で迎えてくれたのは彼女の助けたぬいぐるみ。

ベッドに横になると、抱きしめたぬいぐるみとともに瞳を閉じた。

## 第七話 涙

「たっだいま」

誰もいない小屋に、あてなの声が響いた。  
すると、

お力えり。

オカエリなサイ。

どこからともなく、か細い声が聞こえてきた。  
あてなは棚に置いてあったぬいぐるみ一つ一つに手を伸ばして撫でる。

「うん。ただいま。昨日はごめんね。ちょっと迷子になっちゃってさ」

そして猫のぬいぐるみを手に取ると、勢いよくベッドに飛び込む。

まいご？

「そ。でもね、不思議な洋館で可愛いお人形さんを見つけたよ。みんな楽しそうに笑ってて面白かった」

たノしそウ……？

笑ってる……

聞こえていたか細い声がさらに小さくなった。  
それにあてなも何故か寂しそうな顔をして、

「うん。……あんなに嬉しそうなお人形さん、初めて見た」

天井を見上げながら思い出すようにつぶやいた。  
ほんの少し、涙を浮かべながら。

「幸せそうだった。一度も絶望を感じていないみたいに、純粹に、笑ってて……」

気がつく、あてなの声が震えていた。

「……ずっと、一緒なんだろうね。あの子たちは、主人とずっと一緒に生きていられる……」

うらやまし。

ワタシたち、もう……

「あ……！ ご、ごめんね！」

ごしごしと涙を拭くと、猫のぬいぐるみをぎゅっと抱きしめた。

「大丈夫！ キミたちはボクが守ってあげるから！ ずっと、いつまでも、ね？」

ありがと。

「……そうだよ。キミたちの思い出が消えるまで、ボクはずっとそばにいるから」

あてなは瞳を閉じると、祈るようにささやいた。

## 第七話 涙（後書き）

ちよつと紅葉記の修正してたら遅れました；  
自分の書いたお話を読むのってちよつと恥ずかしいです……



## 第八話 好奇心（前書き）

洋館の書齋で古びた書物を開くアリス。

しかし、ボロボロの表紙の本を紐解いても求めている答えは見つからない。

そんな中、魔理沙が再び洋館に訪れた。

## 第八話 好奇心

魔法の森にたたずむ洋館。

アリスは書斎で、古びた書物を開いていた。

本の表紙はボロボロでタイトルすら読みとれない。

眼鏡をかけた彼女は静かにページをめくっていた。

「彼女、一体何者だったのかしら？ 人形の表情を読み取るなんて聞いたこともないわ」

ぶつぶつと独り言をつぶやきながら、次のページを開く。

一通り目を通して、また開く。

途中、興味のある記述を見つけると注意深くその文章を見つめるが、結局は関係の無い記述だったため本を閉じる。

アリスは眼鏡を外して、椅子にもたれかかった。

この本にも、書いていない。

そして読み終えた本を適当な場所に積み重ねる。

「妖怪の山の奥なんて、皆目見当つかないわ。そんな場所にゴミ捨て場があるとも書いていないし……」

コン、コン。

書斎のドアが小さく音を立てた。

どうぞ、とアリスがうながすとドアが開く。

「アリス。マリサガキタゾ」

「魔理沙……？ 忘れ物でもしたのかしら？」

眼鏡を机の上に置くと、アリスは部屋を出ていった。

「おーアリス。ちょっといいか？」

「何よいきなり。私は忙しいのだけれど」

「昨日来てたヤツ、覚えてるだろ？」

アリスの眉がピクつと反応する。

「ええ。それが？」

すると魔理沙はアリスの心を見透かすように、

「おまえ、気になってんだろ？」

悪戯っぽく微笑んでみせた。

「……どうしてそう思うのかしら？」

「人形の表情がわかる人間だぜ？ 人形使いのおまえなら興味を持つのが当然だろ？」

「……………」

まさしくその通りだった。

アリスが先ほど読んでいた書物も、それに関する情報を得るために読んでいたものだった。

「ヒマなら探しに行かないか？ アタシもちょっと興味あるしな」  
アリスは少し考えてから、

「……そうね。魔理沙がそこまで言うのなら、少しぐらい付き合っ  
てあげてもいいわよ」

「なんだよ。素直じゃねえな？」

「うるさいわね。準備するから、外で待ってなさい」

ニヤつく魔理沙を外へ追い出すと、アリスは早速準備に取り掛かった。

## 第八話 好奇心（後書き）

お気に入り登録件数が増えたとやっぱり嬉しいですね。  
これからもちよつとずつ、頑張って作業します。  
コメント、評価等、ありがとうございます。

## 第九話 厄神様の散歩道（前書き）

早速妖怪の山に乗り込んだアリスと魔理沙。

山の中腹で休憩していると、二人の前に不思議な少女が現れた。  
紅いドレスに紅いリボン。

そして何故か、少女は二人の前でぐるぐると回り続けていた。

## 第九話 厄神様の散歩道

幻想郷の北端に位置する妖怪の山。

様々な妖怪が棲むこの山に、二人の少女が森をかき分け進んでいた。一人は箒にまたがった黒いローブの少女。

もう一人は、小さな人形を抱えながら少女のあとをふらふらと歩いていた。

「アリス、おまえも飛べばいいじゃねえか？」

黒いローブの少女は見降ろしながらつぶやいた。

「あまり目立ちたくないのよ。万が一変なヤツに見つかったら面倒でしょ」

「そうだったら、アタシのマスパでドカーン！ で万事解決なんだからぜ」

「……はあ」

こめかみを押さえながらアリスはため息をつく。

そんなやり取りを幾度とくり返しながら、二人はでこぼこと安定しない山道を進み続ける。

日は中天を過ぎ、穏やかな日差しが注いでいた。

休憩をはさみながら歩き続けると、二人は山の中腹に辿り着いた。

「しかし、ゴミ捨て場なんて全然見えないな。ホントにこんな場所にあるのかよ……？」

「あら、魔理沙はもうギブアップなのかしら？」

「だってよお……」

魔理沙は仰向けに地面に倒れると、ゼエハアと大きく肩で息をしていた。

「さすがに疲れたぜ。けっこう長いこと飛んでたし……」

「だらしないわねえ……あなたが誘ったんじゃないの」

とは言うものの、アリスも額に汗をにじませていた。

腕で拭ってから、一度大きく深呼吸をする。

山の新鮮な空気が全身に染みわたり、体の疲れがほんの少しだけ和らぐ。

「あらあら？　また人間が迷いこんだのかしら？」

どこからともなく、少女の声が響いてきた。

「誰？」

「ああ？　どつかで聞いたような声だな……」

二人が辺りを警戒して見まわしていると、目の前に不思議な少女が現れた。

紅いドレスを身にまとった、儂げな表情の少女。

ダークグリーンの長髪を同じく紅いリボンで結わえている。

そんなことより、アリスが一番気になったのは……

「……何コイツ。何が楽しくてくるくる回っているのかしら？」

何故か少女は、宙に浮きながら体全体でくると回転していた。

アリスは顔を引きつらせながら、尚も回転し続ける少女を見つめる。

「ここは危険よ。人間は早く帰りなさい……って、前にも見た顔があるわ」

少女は回るのを止めると、魔理沙の方をちらと見た。

「えんがちよ」

「まだ何も言っていないのにひどいわね。私はあなたたち人間を守るために警告してるのに」

「ちよつと魔理沙。この変態は何」

魔理沙は額に手を当て、思い出そうとうんうんと唸る。

「えつと……誰だっけ？　見覚えがあっても名前は覚えてないんだぜ」

「変態呼ばわりするわ、名前を忘れるわ……こんな人間のために厄を集めているのかと思うと泣けてくるわね」

「厄やく？」

すると少女はドレスのすそを軽くつまんで、

「鍵山雛かぎやまひな。この山で人間に降りかかる厄を集めております」

優雅に会釈してみせた。

しかし、雛がせっかく丁寧に挨拶したのに、

「アリス、えんがちょ」

「ここを切るのよね」

二人は無視してさっさと縁を切ろうとしている。

「……そんなことより、この山は危険だって言ったでしょう？ 早く立ち去りなさい」

「あ、ちようどいいや。おまえ、この辺にゴミ捨て場があるの知ってるか？」

魔理沙が訊ねると、雛は不思議そうな顔をした。

「あら？ どうしてそのことを知ってるのかしら……？ あそこは特別な場所なのに……」

「知ってるのね？」

雛はうなずいた。

「私は今からそこへ向かう途中なのです。……もしかして、二人はあてなさんのお知り合いかしら？」

その名を聞いてアリスが反応する。

「ええ。そうよ。彼女の居場所を知ってるのなら、案内してくれないかしら？」

少し間を開けてから、雛はもう一度うなずいた。

「あてなさんの友人ならまあ……いいか。今回だけ特別ですよ」  
そして雛は再びくるくると回りながら山の奥へ奥へと進んでいった。



## 第九話 厄神様の散歩道（後書き）

タイトルで誰が登場するかバレバレの回w

どうして彼女はくるくる回ってるんですかね？

ああいやでも、四六時中回ってるわけではないとは思っけど……

## 第十話 果てのゴミ捨て場（前書き）

雛の案内で歩いていると小高い丘とゴミ山が見えてきた。

丘の上には、青い屋根をした小さな小屋がぽつんと立っていた。

雛がドアを叩くと、騒がしい音とともにあてなが出迎えてくれた。

## 第十話 果てのゴミ捨て場

雛の後をついて歩いていくと、二人は開けた場所に辿り着いた。目の前に小高い丘とゴミの山が見えた。

鉄くずや木くず、何かの機械の部品のようながらくたが積もりに積もった山と、その奥に見える青い屋根の小屋が、緩やかな傾斜の丘の上に静かにたたずんでいる。

その異様な光景に二人は呆然としていた。

雛は丘の上の小屋を指差しながら、

「あの小屋、見えるでしょう？ あれがあてなさんの小屋です」  
そう言った。

そして三人は、ゴミ山と隣接する坂道をゆっくりと上る。

小屋は小さな庭と青い屋根以外、他に特徴のない質素な小屋だった。

「ずいぶんと粗末な小屋ね。本当にこんなところに住んでいるの？」

「しっかしこの臭いはキツイぜ……？」

横から流れる異臭に魔理沙が顔をしかめる。

雛は相変わずくると回り続けながら小屋の玄関まで飛んでいくと、ドアを軽く叩いた。

「あゝい！ 今行きます！」

やや間があつてからあてなの声がドア越しに聞こえた。

雛が一步下がると、何やらどたばたと騒がしい物音を立てながら勢いよく開いた。

「はあゝい！ いらっしやいま……あれ、魔理沙さんにアリスさん？」

突然現れた二人に、あてなは目を白黒させた。

「よッ。遊びに来たんだぜ」

「こんにちは、あてなさん」

「うわあ！ 嬉しいなあ！ 早速遊びに来てくれたんだ？ ……つて、でも二人はどうやってこの場所に？」

あてなが不思議そうな顔をしていると、横から雛が事情を話した。  
「私が案内したんです。本来、人間を見かけたら警告して追い出す  
のだけど……」

それを聞いたあてなはうんうんとうなずいた。

「そっか。雛ねえちゃんが案内したからか。うん、納得」

「ずいぶんと親しいのね？」

「雛ねえちゃんはボクの命の恩人だからね。……っと、立ち話もな  
んだしみんなあがってあがって」

あてなはドアを大きく開けると、三人を丁重に招き入れた。

## 第十話 果てのゴミ捨て場（後書き）

ふと思ったのですが、一話1000文字程度つてのは短くないですか？

他の人のお話を読んでいた時にふと思ったんですけど、俺のお話ボリューム不足かな……と；

うーん、でもあんまり長いと読むの疲れちゃうんじゃないかなあ？

……という独り言でした。

## 第十一話　ぬいぐるみに囲まれて（前書き）

あてなの小屋を訪れる魔理沙とアリス。

小屋の中にはどこもかしこもぬいぐるみ。

散らかる部屋を片付けるあてなの姿に、雛は楽しそうに微笑んでいた。

## 第十一話　ぬいぐるみに囲まれて

「う……わッ!？」

小屋に入った途端、目の前の光景に魔理沙は思わず声を出して驚いた。

まず目に入ったのは天井まで届きそうなほどの大きな棚。

中には所狭しと並べられた大量のぬいぐるみが置いてある。

しかもその棚は一つだけでなく、部屋の奥にも、手前にも、右にも左にも、ありとあらゆる場所に設置されていた。

もちろん、棚の中身は全てぬいぐるみ。

大きな猫のぬいぐるみ、シンバルを持った笑顔のサルのぬいぐるみ、貝殻を抱えた犬みたいなぬいぐるみ、黄色い体でほっぺの赤い……これはネズミだろうか？

他にもいろいろな種類のぬいぐるみが置いてあったが、魔理沙は苦笑いを浮かべながら目を反らした。

「ごめんねえ？　ちよつと散らかってるけど我慢してね」

そう言いながら足元の物を退けるあてな。

よく見ると、足元にまでぬいぐるみが散乱している。

「……ある意味お化け屋敷並みに不気味だぜ」

「そう？　けっこう可愛いお部屋じゃない」

アリスは事もなげに言うと、そばに置いてあったぬいぐるみを一つ手に取った。

それは新品同様に清潔でふかふかだった。

「これ、全部あなたが直してるの？」

「そうだよ？　それがどうかした？」

部屋の片づけをしながらあてなが答えた。

アリスはぬいぐるみを優しく撫でながら言った。

「ホントに上手いわね……私も裁縫は出来るけどここまで上手く出来ないわ」

するとあてなは両手をぶんぶん振り回しながら顔を真っ赤にした。

「そ、そんなことないって。ボクなんかまだまだだよ。この子たちの怪我を直すだけで精一杯なんだから……よつと！」

片づけを終えると、あてなは空いた場所にテーブルと人数分の椅子を並べた。

「お茶の支度するから、座って待ってて！」

並べたばかりだというのに、今度はすごい速さでキッチンへと走っていった。

そんな姿を見て雛は小さく微笑んだ。

「相変わらず元気いっぱいね」

「落ち着きが無いって言うんじゃないかああいうの……」

それぞれが椅子に腰をかけると、三人が息つく間もなくあつという間にあてなが帰ってきた。

「お待たせ〜！ ハア、ハア……」

「おいおい、茶の用意だけで息を切らせてどうすんだ」

「魔理沙さんとアリスさんの分のカップ探すのにちよつと手間取って……えへへ」

そしてあてなはカップを手にとると、用意したお茶を誰よりも先に飲み干した。



## 第十一話　ぬいぐるみに囲まれて（後書き）

ちよっとお久しぶりです。

今度から日曜日もちゃんと更新しようかな……

一気に閲覧者数下がってちよっと凹んでいます、

## 第十二話 忘却の苑（前書き）

お茶の用意ができると、アリスは早速この不思議な場所について質問した。

いきなり真面目な質問をされて驚くあてな。

そして一度微笑んでから、ゆっくりと口を開いた。

この場所、『忘却の苑』について……

## 第十二話 忘却の苑

自分のカップに再びお茶を注ぐと、あてなは行儀よくちゃんと腰を下ろした。

「それじゃ、何をお話しようか？」

「質問してもいいかしら、あてなさん」

アリスはカップを掴みながらあてなを見つめた。

「あてな、でいいよ。それで聞きたいことって？」

アリスが口を開く。

「まずはこの場所について。ここはどういう場所なのかしら？ 古い文献にも、このような場所は記されていないかったわ」

その言葉に、あてなは目をぱちぱちさせた。

そして軽く笑んで、

「んつと……エへへ、いきなり真面目な質問で驚いちゃった。うん。それじゃお答えしましょう」

コホンと咳払いしてから話し始めた。

「ここは『忘却の苑』<sup>はつこく</sup>っていう場所だよ。ずっと昔、巫女様が特殊な結界を張って作った場所なんだって」

「巫女様？」

「なんだ？ 霊夢のことか？」

「さあ……？ 巫女様の名前まではわからないけど、あてなが続ける。」

「ここはちよつと変わった場所だね。普通に山を歩いていても絶対に辿り着けないようになってるの。だから、外から人間とか妖怪が来ることはほとんどないの」

その言葉に魔理沙が首をかしげる。

「いや、アタシら普通に來てるぜ？」

「それは雖ねえちゃんの家内があつたからだよ。神様ならここまで道が見えるんだって。ね、雖ねえちゃん？」

雛は笑顔でうなずいた。

「文献に載っていない理由は？」

「それはちよつとわからないけど……ううん、この場所そのものが忘れ去られてるからじゃないかな？」

「……？ 意味が少し、わからないのだけれど」

さすがのアリスも首をかしげた。

「ここは、幻想郷に忘れ去られてる場所なんだよ。生きてる人みんなが忘れてるから、ここに辿り着けないし、誰も文章に残すこともないの」

「だあゝ！？ 訳が分からないぜ！？」

「お、怒らないでよ。ボクだっていまいちわかってないんだから」  
アリスはあごに指を当てて思案する。

「人間では理解できない場所、とでも言うのかしら？ ……ぜひとも神の意見を聞いてみたいわね」

そして雛の方へと向き直った。

「そつか！ 雛ねえちゃんわかる？」

「え、ええ！？ わ、私？」

突然話を振られてあたふたと戸惑う雛。

一同の視線が集中する中、雛はとりあえず腕を組んで考えてみるが

……

「う、ううん……ううん……」

うなり声以外、何も出なかった。

「なによ、使えない神ね。あなたくるくる回る以外取り柄ないの？」

「そ、そこまで言いますか！？」

雛は半分泣きながら言ったが、アリスはため息一つついただけでそれ以上何も言わなかった。

……しかし、アリスは少し疑問を抱いていた。

（幻想郷に生きる人が忘れた場所なら、どうしてあてなはこんなに詳しいのかしら……？）

無邪気に笑うあてなを見つめながら、アリスはぼんやりと考えていた。

## 第十二話 忘却の苑（後書き）

設定……途中で破綻しないか心配です；

何気にこのお話は行き当たりばったりで書いてる部分が多いので……  
でも、読んでくれる人が楽しんでくれるなら大丈夫……かな？

### 第十三話 あてなの力（前書き）

続けて魔理沙が、ぬいぐるみの修繕について質問した。

すると、あてなは二人の目の前で実演してみせた。

そして直ったぬいぐるみが動き出すと、魔理沙もアリスも驚きの表情を浮かべた。

### 第十三話 あてなの方

「アタシも質問していいか？」

アリスの質問を終えると魔理沙が身を乗り出した。

「いいよ？」

「ぬいぐるみってどうやって直すんだ？ 直した後はどうなんだ？」

「それは……あ、そうだ！」

するとあてなは棚から一つのぬいぐるみを取り出した。

しましま模様の、なんだか気の抜けたような顔をした猫のぬいぐるみ。

そのぬいぐるみはアリスが手に取ったものと違い、体全体が黒ずんでいて両腕が千切れかけていた。

「今から直すとこ見せるよ。その方が早いでしょう？」

そしてあてなは、エプロンのポケットから小さな針と糸を取り出した。

「針と糸で……って、それだけか？」

「他には補修用の布とか、色のついた糸も使うよ」

「手縫いで全部やるの？」

「そ。この子ならあつという間に直せるかな？ んじゃ、ちょっと痛いけど我慢してね」

あてながぬいぐるみに優しく語りかけるように言った。

うん。わかッタ。

あてなは針を指で軽くつまんで瞳を閉じる。

すると、針に薄い光が集まりだした。

それを確認すると、今度はゆっくりとぬいぐるみの体に針を刺した。針はすんなりとぬいぐるみの体を通って糸をめぐらせる。

千切れた腕をそっと握りながら、少しずつ確実に糸を通していく。



どこにも無駄のない動きに、魔理沙は思わずほえ〜と間抜けな声をあげていた。

ものの数分で片腕がくつついた。

試しに軽く動かしてみても、取れるような気配は全くない。

続けて、もう片方の腕も難なく付けていく。

ぬいぐるみの腕はあつという間に直ってしまった。

しかしあてなはぬいぐるみの体を見て眉をひそめた。

「ん〜、でもちよつと体がボロボロだなあ……ちよつと本気出さないと無理かも」

「本気？」

すると今度はポケットから一枚の符を取り出した。

魔理沙もアリスも、もちろん雖も知っているスベルカード術符だった。

「つておいそれスぺカだろ？　ぬいぐるみぶっ飛ばす気かよ？」

「大丈夫。ボクのは特別な」

あてなが意識を集中させると、符に淡い光が宿る

それを確認してからゆっくりとぬいぐるみの体に当てる。

「裁符『リバース・クロース』」

符の淡い光が突然閃光となって部屋を包みこむ。

あまりの眩しさに、魔理沙もアリスも目をつぶる。

やがて光は、あてなの手のひらの上で小さくなっていった。

「どう……なつたんだ？」

「ごらんの通り」

そこには、先ほどと同じぬいぐるみが横たわっている。

気の抜けたような顔をした猫のぬいぐるみ。

しかし、ボロボロだった体はまるで新品のように真っ白でふんわりとふくらんでいた。

あてなはご満悦といった様子で、

「ボクのスぺカは、この子たちの修理にも使える特別製なんだ。どう？　驚いた？」

自慢するように胸を張った。

「そんなスペカ初めて見たぜ……」

真新しい体のぬいぐるみを見つめながら魔理沙がつぶやいた。  
アリスも興味津津といった様子でぬいぐるみとあてなを交互に見ていた。

「んで、直ったそいつはどうするんだ？」

「っと……それはこの子次第かな」

体が直ったぬいぐるみをあてながゆつくりとテーブルの上に立てる。

すると、ぬいぐるみがふるふると揺れ動く。

ありがとう。

「なッ……！？」

「お、おい！ し、しゃべったぞコイツ！？」

ふらふらとおぼつかない動きで立ち上がるぬいぐるみを見て、魔理沙もアリスも思わず飛び退いた。

「なにもそこまで驚かなくてもいいでしょ？ ここにいる子たちみんな普通に動けるんだよ？」

周りに置いてあるぬいぐるみが全て動く……？

二人は左右別々の方向へと視線を反らした。

「……！？」

「う、うわあああ！？」

そこには、棚のぬいぐるみすべてがそれぞれに手を振ったり、お辞儀をしたり、踊ってみせたりしていた。

ありがとう。

ようこそ。あてナの才友達。

魔法使イナのか？

可愛い才友達だね。

クスクス……フッフ……ケラケラ……

気がつくと二人はぬいぐるみたちのささやき声に包まれていた。部屋中に響く小さなささやき声に、魔理沙は顔を引きつらせた。

「マジでおばけ屋敷よりも不気味だぜ……？」

「さっきの発言……撤回しようかしら」

引きつった表情を見せる二人に、あてなが言った。

「不気味だなんて失礼だぞ？ みんないい子だからなんにもしないのに」

あてなは先ほど直したぬいぐるみに向き直る。

「キミはこれからどうするの？」

ぬいぐるみはぼんやりとあてなを見つめて、

わからない。どうしタイのか、どうすればイイのか……

今にも消えそうなほど小さな声で答えた。

あてなはそれを聞くと、ぬいぐるみの頭を撫でた。

「それなら、ボクと一緒にいない？ ここなら仲間もいるし、きっと楽しいよ！」

天真爛漫な笑顔を見上げるぬいぐるみ。

少し間をおいてから、その小さな頭が小さくうなずいた。

いイノ？ 迷惑じゃないの？

「まつさかあ？ みんなも仲間が増えるから嬉しいでしょ？」

仲間、フえる！

友達、幸セ！

棚のぬいぐるみたちはみんな大喜びだった。

幸せそうな声が、部屋中に響いてくる。

「え……あ、一体どうなってるんだ……？」

魔理沙もアリスも、ただその光景に目を見張るだけだった。  
正直、さっぱり理解できない。

「えへへッ！ それじゃキミのお部屋を用意しないかね」

ただ、あてなはとても幸せそうに笑っていた。

### 第十三話 あてなの力（後書き）

今回、ちょっと長いです；

ホントはもう少し詰めて短くしようかと思ったのだけど……

まあ、いいやw

## 第十四話 沈む太陽（前書き）

お茶会を終えて片づけを始めるあてなとアリス。

修繕のことをアリスが話すと、何故かあてなは暗い表情になった。

どこか寂しげな、何か後ろめたさを感じさせるような顔をしていた。

## 第十四話 沈む太陽

「すごいもの見せてもらったわ」

日が傾きかけたころ、洗面台で食器を片づけているあてなにアリスが言った。

その手を途中で止めると、あてなは微笑んだ。

「すごくないかないよ、全然。ボクが出来るのは見える傷を直すことと、あの子たちと一緒に過ごしてあげることしかないんだもん」

「でもあの子の声、私にも聞こえたわ。とっても幸せそうだったじゃない」

すると何故かあてなは急に、太陽が沈んだみたいに暗い顔をした。

「……そんなこと、ボクにはわからない」

「え……？ どうして？ あなたは人形やぬいぐるみの表情が読めるのでしょうか？」

「表情なら見えるよ。でも……」

暗い表情のまま、あてなは独り言をつぶやくように続ける。

「あの子たちが、本当に幸せかどうかなんて、ボクにはわからないし、わかつちやいけないんだよ」

「わかつてはいけない……？」

アリスも途中で手を止めると、あてなの方へと向き直る。依然として暗い表情のまま。

ただ、どこか悲しげな、なにか後ろめたさを感じるような表情をしていた。

「あてな……？」

あなた一体、と言いかけた時、

「おい！ アリスそろそろ帰ろっぜ？」

魔理沙の声が遠くから聞こえた。

「……ほら、魔理沙が呼んでるよ？ 早く片付けなきゃ」

「え、ええ……」

そして再び片づけを始めるあてな。

先ほどの暗い表情が嘘のように、あてなは笑顔で食器を洗っていた。

「それじゃ、アタシたちは帰るとするか。おまえはどうすんだ？」

すると雛は優しく微笑んで、

「私はまだ、あてなさんと少しお話が残っているのよ」

「うん？ アタシたち帰りはどうすんだ？」

「そのまままっすぐ歩いていけば、最初に私と出会った場所に出ますよ」

「そっか。んじゃ行こうぜアリス。……アリス？」

「え、ええ……？ なにかしら？」

ボーっとしていたアリスに、魔理沙は怪訝そうな顔をした。

「なんだ？ おまえがボケっとしてるなんて珍しいな」

「し、してないわよ。ほら、さっさと帰るわよ」

「へいへい。んじゃ、またな」

そして大きく手を振りながら魔理沙は箒にまたがって夕暮れの空を飛んでいった。

「それであの、雛ねえちゃん……」

二人がいなくなっただけで残されたあてなと雛。

雛はあてなの言葉に無言でうなずいた。

「中でお話しましょうか。夜は冷えますから」

そして二人は小屋の中へと戻っていった。



## 第十四話 沈む太陽（後書き）

うーん……新作の準備してるんですけど、アイデアが固まらない；  
オリジナルもなんか微妙だなあ……

## 第十五話 秘密のお話（前書き）

二人が帰ってから、あてなと雛は二人で話をしていた。  
あてなが失くした思い出。あてなが探している思い出。  
そして雛はゆっくりと、語りはじめた。

## 第十五話 秘密のお話

「雛ねえちゃん、早速なんだけど……」

怯えるような目で雛を見つめるあてな。

雛は一度小さくうなずいて、

「ええ。わかってますよ。それを教えるためにここまで足を運んだのですから」

微笑んだ。

そして椅子に座ると淡々と話した。

「あなたの失くした思い出。……あなたが、この幻想郷で探している思い出ですが、たしかに幻想入りしているようです」

「ほ、ホントに!？」

あてなが椅子から身を乗り出す。

雛はそのまま続ける。

「しかし、まだはつきりとした場所がわかっていません。この広い幻想郷のどこを彷徨っているのか……それは現在調査中です」

「そ、そっか……」

意気消沈したあてなは力なく椅子にもたれかかる。

とても今にも泣き出しそうな、悲しそうな顔をしていた。

「元気出してください。この幻想郷に辿り着いたことがわかったなら、あとはそれを探すだけです」

「うん。うん……それは、わかってるんだけど………わッ!？」

目を伏せてうつむくあてなに、雛は優しく微笑むと小さな体を抱き寄せた。

「あなたがそんな調子でどうするのですか。もっとあなたらしく、元気に笑ってください。いつもあなたが、あの子たちに微笑むように」

「う……うん。そうだね。笑って……か」

どうにか微笑もうとするが、

「……ごめん」

とてもそんな気分には、なれなかった。

あてなは雛の腕の中で小さく震えた。

「一度棄てた思い出を、もう一度探そうとしてるなんて……ボク、情けないよね。そんなに大切なら棄てなければいいのに。急に寂しくなって、また探して。そしていつかまた……あの日のように棄ててしまうのかもしれない」

「でもそれはあなたが本当に望んだことではないのでしょうか？」

「それでも、ボクが棄てたんだ！ 振り返れなかった！ 手を、伸ばさなかった！」

あてなは泣いていた。

大声を張り上げて、うつむいて、雛の腕の中でぼろぼろと涙を流した。

「それでも大切な思い出だから、あなたはここへやってきたのでしょうか？ なら、あなたは胸を張って会いに行くべきだと私は思いますよ」

「………」

あてなはなにも答えなかった。

答えられなかった。

どう答えればいいのか、自分でもわからなかったから。

「……ごめんね、雛ねえちゃん」

あてなの頬を流れる涙を、雛はそつと指で拭った。

「この涙が、あなたを苛める厄であるのなら、それを拭って抜うことが私の使命です。……存分に、厄を流してもいいのですよ？」

優しく頭を撫でると、あてなは感極まって雛の胸に顔を埋めて嗚咽をもらした。

「………う、うう………つく、うわああああん！」

「思い出とは、儚く切なく、愛おしいものです。取り戻そうと手を伸ばすことは、恥じるべき事でないのですよ………」

震えるあてなを抱きとめながら雛がささやいた。

そんな泣きじゃくるあてなを、ぬいぐるみたちも寂しそうに見つめていた。

## 第十五話 秘密のお話（後書き）

今日は特にこれと言ってコメントは……無し；、  
あでも、お気に入り登録してくれた方々、ありがとうございます！

## 第十六話 人形劇（前書き）

月に一度の、人間の里のお祭り。

派手な衣装の人々、広がる面や射的の屋台。

そして、中央の広場でアリスは人形劇の準備を始めていた。

## 第十六話 人形劇

人間の里。

幻想郷を生きる人間が集い生活を営む場所。

アリスは里の真ん中にある小さな広場で大きなかばんを抱えていた。

「お祭りなんてずいぶんと久しぶりね」

黄昏た空に映える提灯の明かり。食べ物や面を売る屋台。

里の人々は派手な衣装を身につけて笑顔で踊っている。

今日は里で月に一度行われるお祭りの日だった。

「子供の相手は苦手だけど、あの無垢な笑顔を見てると癒されるのよね……」

そう独り言をつぶやくと、アリスは再び準備に取り掛かった。

「あ、人形劇のおねーちゃんだ！」

そんなアリスを見つけた子供たちが、一斉に集まってくる。

「人形劇まだ？」

「はやくはやくー！」

「はいはい。もうすぐだからちょっと待ってて？」

子供たちを適当にあしらうと、アリスは大きなかばんを開いた。

人形を操る糸と、衣装と、主役の上海人形。それと、

「せっかく仕立ててもらったのだから、使わないと彼女に悪いわね」

いつか仕立ててもらった、綺麗な群青色のドレス。

丁寧にたたんであったドレスをアリスはそっと取り出した。

「うわー！ 綺麗なドレス！」

「お人形さんの？ お人形さんの？」

子供たちが目を輝かせる。

遠慮なしに手を伸ばす子供たちにアリスが困惑していると、

「はいはい。みんな落ち着いて？」

澄んだ鈴の音のような凜とした声がした。

顔を上げると、そこには穏やかな表情で微笑む一人の女性が立って



いた。

「あ、けーねせんせー！」

「先生だー！」

先生と呼ばれた女性はあつという間に子供たちに囲まれた。

「人形使いのお姉さんが困ってしまうでしょう？ 準備ができるまで、もう少し我慢してください」

「はーい！」「はーい！」

すると、子供たちはクモの子を散らすように面を売る屋台や金魚すくいの屋台へと飛んでいった。

「ふふふ。今日も元気ですね」

かみじろさわ  
「上白沢、慧音……」

目の前で微笑む女性を、アリスは静かに目を細めた。  
青い清楚なスカート。

頭にちゃんと乗せた小さな帽子と、絹のようになめらかな銀色の髪。  
子供たちを見つめる瞳は慈愛に満ちた色をしている。

上白沢慧音。

この人間の里で寺子屋を開き、子供たちに勉学を教えている……

「申し訳ありません。子供たちはいつもあなたの人形劇を楽しみにしているもので……」

「かまわないわ」

アリスは視線を戻すとかばんの中身を無言で取り出す。

「今年はどんな劇を披露してくれるのですか？」

慧音はそんなアリスに優しく訊ねた。

「秘密」

小さな人形をいくつか取り出しながらアリスはそっけなく答えた。

人形劇用の小さなステージを組み立て、人形たちを演じる役ごとに衣装を着替えさせる。

今日の劇は……英雄譚にでもしようか。

勇敢な騎士が、囚われの姫を助けた……ありふれたファンタジー。  
「……ところで、いつまでそこにいるのかしら？ あまりジロジロ

見られていると気が散ってしまうのだけれど？」

「あらあら。それは失礼しました」

そして再び小さく微笑むと、慧音は静かに去っていった。

「なにしに来たのかしら……まったく」

はあとため息すると、アリスはステージに人形を並べた。

「それじゃ、上海。お願いするわね」

「ガッテンダアリス」

「そんな言葉、教えた覚えはないのだけれど……」

そして、群青色のドレスをまとった人形は大きなベルを鳴らした。

小さな人形劇の開幕だ。

## 第十六話 人形劇（後書き）

明日はちよつと更新お休みです；

## 第十七話 終演とともに（前書き）

人形劇を終えると、再び慧音がアリスの前に現れる。

片づけを済ませ立ち去ろうとした時、彼女の口からあてなの名が聞こえ振り向く。

あてなは何故、慧音のもとを訪れたのだろうか……？

## 第十七話 終演とともに

アリスの操る人形に目を輝かせながら見つめる子供たち。

騎士が戦うシーンで時には顔を覆って怯えてみたり、悲しいシーンでは涙を浮かべたりと、子供たちは純粋な喜怒哀楽を見せてくれた。劇はあつという間にクライマックスを迎え、そして幕を閉じた。

「楽しかったよ！ おねーちゃん！」

「楽しかったー！」

ステージにわき起こる子供たちの歓声、そして拍手喝采。

アリスは人形と共に小さく一礼してみせた。

人形劇を終え、アリスはステージの片づけをしていた。

「素晴らしい劇でしたわ」

すると再び慧音がアリスに近付いてきた。

相変わらず、穏やかな表情でアリスを見つめていた。

「ありがとう」

人形をしまい、かばんを閉じると慧音に背を向けて立ち上がる。

「一つ、お訊ねしてもよろしいでしょうか？」

「なにかしら？」

「あてな、という少女を知ってますか？」

その言葉に足を止めるアリス。

そしてゆっくりと慧音に向かって振り返る。

「……………どうしてそれを私に？」

「彼女とのお話の最中、あなたの名前が出ましたので。もしかしたらお知り合いなのかと思ひまして」

優しく微笑む慧音。

「ええ。少し前に知り合ったわ。……………それがなにか？」

「いえ、たいしたことではないのですが……………」

「……………？」

言葉の真意が読めない。

慧音はなにを言いたいのだろうか？

アリスは睨むように目を細めた。

「おかしなことを聞かれたのですよ。忘れ去られた者が集う場所はないか、と」

「忘れ去られた者が集う場所……？」

「この幻想郷にそのような場所があるなどという話は私も聞いたことがなくて、結局答えられずじまいだったのですが……」

「あなたが食べた、とても思ったのかしらね？」

「いくら私とて、存在しない歴史を食べるなんてことはできませんね」

クスクスと微笑交じりに微笑む慧音。

歴史を食べる、というのは慧音の能力のことである。

歴史とはこの幻想郷に生きる人間が書き記した出来事を記した文献などであり、彼女はそれを文字通り食らうことでその存在を吸収し、あるいは抹消できる。

抹消、といっても実際に消すのではなく、見えなくする……と言った方が正しいのだろうか。

（いちいちややこしい半獣なんだから……）

半眼で見つめるアリス。

聞いた話によると、彼女は満月の夜にはワーハクタクという獣人になるらしいのだが……今は特に興味がない。

「彼女、何者なんですか？」

「それは……私が知りたいくらいだわ。知り合いと言っても、昨日今日出会ったような程度の関係だし」

アリスは正直に答えた。

「彼女、ひどく切羽詰まったような顔をしていて少し気になったのですけど……なにをあんなに焦ってたのでしょうか？」

「……そこまで聞かされると気になるのだけれど。彼女、あなたにどんな話をしたの？」

以前見た彼女の表情のこともあり、逆にアリスが慧音に訊ねた。

「あてなさんが私の寺子屋を訊ねてきたのはたしか……」

すると、慧音は当時の出来事を思い出すように静かに語りだした。

## 第十七話 終演とともに（後書き）

……実はこの十六話と十七話をさっさと消してしまいたいです；  
しかし、ここまで読んでくれた方々に大変な迷惑をかけてしまうので現在プロット書き直し中です；  
最初からきっちりとしたプロットが書ければいいんですけど……まだまだ未熟です。



## 第十八話 慧音とあてな（前書き）

寺子屋で子供たちに勉強を教えていた慧音。  
するとそこにあてなが現れた。

歴史を知りつくす慧音に、あてなはあることを訊ねた。

## 第十八話 慧音とあてな

「それでは、次の問題を……あなた。やってごらんない？」

そつと指差された少年がはい、と返事して立ち上がると黒板に向かつて問題の解答を書きだした。

少年が白いチョークを置いて席に戻ると、慧音が答えを確認して微笑む。

「はい、正解です。それでは、次の熟語の意味を……」  
と、そこで定時を告げる鐘が響いた。

「と……今日の授業はここまでですね。では、宿題を出しますので次の授業で」

「先生」

すると、教室の外から一人の男が顔をのぞかせた。

「あら？ なにかしら？」

慧音が授業用の教材を片づける手を止めて振り向く。

「慧音先生に会いたいっていう女の子が来てるんですけど……どうしますか？」

「会いたい女の子……？」

来客の予定などない。

わざわざ私を訪ねる者とはいったい誰だろうか？

慧音は一度うなずいてから、

「ええ。通してくださいってかまいません。その女の子をこちらに案内してくれますか？」

「わかりました」

男は軽く一礼してから去っていった。

「それじゃ、あなたたちはもうお帰りなさい」

「はい！ せんせー、さよーならー！」

子供たち一人一人に挨拶をしてから、慧音はふうと小さく息をもらした。

「……私に会いたい、ですか。いったいどんな方なんでしょう……？」

「慧音先生、お連れしました」

先ほどの男の声がした。

「はい。どうぞ？」

慧音が促すと、先ほどの男の後ろに一人の少女が立っていた。

若草色のローブに、真っ白いエプロン。

青い長髪を途中で結わえた可愛らしい少女だった。

少女は緊張をしているのか、時々体を震わせながら、

「こ、こんにちは！ えと、は、初めまして！ その、突然のご訪問を、お、お許してください……」

やや高めの声で、途切れ途切れにしゃべりだした。

慧音はそれを見て、男に目で促す。

すると男は一礼の後に再び去っていった。

「ようこそいらっしやいました。緊張しなくても結構ですので、どうぞこちらに上がってください」

「し、失礼します」

ぎこちない動きでゆっくりと教室に入る少女。

そして慧音と真正面から向かい合うように正座した。

「あ、あのえと、ぼ……いや、私は系柳あてなと申します。その、実はお伺いしたいことがあります……」

「普段の口調でどうぞ？ あなた、そのお話の仕方慣れてないみたいね？」

「あ、うう……こ、ごほん！」

わざとらしく見えるぐらい大きな咳払いをして、あてなは仕切り直した。

「突然のご訪問をお許してください。その、慧音さんに聞きたいことがあって……」

「ええ。私が答えられる範囲であれば、お答えしますよ？」

慧音は微笑んでみせたが、なぜかあてなは顔を強ばらせながら慧音を見据えていた。

「……慧音さんはこの幻想郷の歴史をご存知ですね？」

「私は幻想郷の歴史の編纂が仕事です。太古の昔の文献から現在に至るまでの、あらゆる事象を記憶していますが……？」

「その歴史の中に、忘れ去られた者が集う場所……みたいな場所がありますか？」

「忘れ去られた者が集う場所……？」

慧音はその言葉に首をかしげた。

聞き覚えが、あるようなないような……

「そんな場所、ご存じないですか？　もしあるなら行く方法と、それから」

「……無縁塚ではないのですか？」

「……いえ、違います」

あてなは首を横に振った。

しかし、慧音にはそこ以外該当しそうな場所が浮かばなかった。

「他にそのような場所、私には見当もつきませんが……なぜあなたはそのような場所を探しているんですか？」

「それは、その……」

目を伏せて口ごもるあてなに、慧音は眉をひそめた。

「言えない理由でも？」

「あいや、そういうわけじゃ……」

「ぜひとも知りたいわ。そんな顔をしてまで探す理由を……」

あてなはひどく悲しそうに顔を歪めていた。

今にも、大粒の涙を流してしまいそうなほどに。

「……」

瞳を閉じて深呼吸する。

そして再び慧音と向かいあうと、

「ボクは……失くした思い出を……探してるんです」

小さな声で、言った。

## 第十八話 慧音とあてな（後書き）

祝！ お気に入り登録件数20人！

## 第十九話 気になるアリス（前書き）

失くした思い出を探している。

あてなは慧音にそう言った。

失くした思い出とはいったい何なのだろうか……？

## 第十九話 気になるアリス

失くした思い出を探している。

あてなは慧音にそう言ったらしい。

「思い出……か」

人形劇を終えたアリスは、書斎で一人つぶやきながら本を開いていた。

が、途中で表紙を閉じると静かに目を閉じた。

「ホント、いったい彼女は何者なのかしら……？」

妖怪の山に存在する、誰もが忘れ去られたゴミ捨て場に住む少女。裁縫をこなす程度の能力を持つ少女。

ぬいぐるみや人形の表情を読み取ることができる少女。

「そしてあの時の表情……」

去り際に見せた、悲しそうな、後ろめたさを感じさせるような表情。糸柳あてな。

彼女は本当に何者なのだろうか……？

「……………はあ」

他人に興味関心のないアリスだが、今はあてなのことが気になってしかたなかった。

なぜだろうか？

自分の人形の表情を読んでみせたからか。

あの悲しげな表情を見せたからか。

それとも……

「まったく、しょうがないわね」

ゆっくりと目を開く。

そして立ち上がると書斎を後にした。

「オハヨウゴザイマスアリス。……アリス、デカケルノ？」

アリスは目覚めとともに簡単な身支度をしていた。  
「ええ。少し出かけるわ。あなたも来るのよ」  
そう言って、アリスは玄関の扉を開けた。



## 第十九話 気になるアリス（後書き）

短い……

次から短いお話のときは二話連続でやろうか……

## 第二十話 あの世界へ（前書き）

あてなの小屋を目指して妖怪の山へ向かうアリス。  
中腹に差しかかると、何故か突然人形が獣道へと飛んでいく。  
その先で、いつか見た丘とゴミ山が見えた。

## 第二十話 あの世界へ

朝。

妖怪の山は朝特有のひんやりとした空気に包まれていた。葉にかかる朝露が上りはじめた太陽にきらめいている。

アリスはあてなの小屋を目指すため、一人この場所を訪れていた。

「たしか、前はこの辺りであの雛とかいう神様に出くわしたのよね

……」

あの時休憩をした中腹地点。

草や木が茂るだけで、もちろん誰もいない。

ほのかな木々の香りだけがアリスのまわりを漂う。

「……………」

目の前に伸びる一本の獣道を前に、アリスは立ち止った。

「……道、どっちだったかしら？」

中腹あたりまでの記憶はちゃんとあるのだが、そこから先が全く思い出せない。

「アリス。ドワスレカ？」

「うゝん……ホントに思い出せないわ。いったいどうして……？」  
必死に記憶を巡るが……

「ダメね。全然思い出せない……って、上海？」

すると、アリスの腕におさまっていた人形が突然飛び出し獣道へ向かってふわふわと飛んでいってしまった。

「ちよつと、上海？ 待ちなさい！」

アリスの声を無視して、人形はどんどん獣道を奥へ奥へと進んでいく。

小さな人形の背中を無我夢中で追いかけるアリス。

そして、獣道が急に開けて……

「あ……………」

いつか見た、あの場所に辿り着いた。

小高い丘とゴミの山。

丘の上には青い屋根の質素な小屋が一つ。

「なんだ。別にあの神様がいらなくても来れたじゃないの。まったく適当な場所ね……」

それにしても、とアリスが付け足す。

「上海。どうして勝手に飛び出したの？ 私の命令には従うものでしょう？」

「……………コエ」

「声？」

人形はアリスを見上げて、

「コエキコエタ。ナイトルコエ」

小さな口でぼつぼつと言った。

アリスは耳を澄ませてみるが……

「声なんて、なにも聞こえないわよ？」

首をかしげた。

いくら耳を澄ましてみても、聞こえてきたのは風の音だけだった。

「……………ここにいっても仕方ないわ。小屋へ行ってみましょう」

人形を抱えて坂道を上る。

ほどなくして玄関の前へと辿り着いた。

「あら…………？」

玄関が、ほんの少しだけ開いていた。

戸が風に揺られてキィキィと寂しげな音を立てている。

「不用心ねえ……………ま、どうせだれも来ないのでしょうけど」

とはいえ問答無用で開けるのもいかなものか。

念のため、アリスはユラユラと揺れる戸軽くノックした。

「ごめんくださーい……………あてな？」

こっそり戸を開けて中の様子をうかがう。

部屋には日が差し込んでいるというのに人の気配は全く感じられない。

大きな棚に収まるぬいぐるみも、力無くぐったりと横たわっている。

「……………」

不審に思ったアリスが中へ入ろうとしたその時、

「あら、あなた？」

振り向くと、そこには紅いドレスの少女がふわりと宙に浮いていた。

「あなた、そこでなにをしているの？」

「鍵山、雛……………」

雛はトンつと地面に着地すると、アリスに向かって歩き出した。

「あてなさんなら外出中ですよ。……………なにかご用ですか？」

「……………ええ。少し気になったものだから」

「気になった、ですか？」

雛の目が少し細くなる。

アリスはその目を静かに見返した。

ほんの少しの沈黙。

「……………中へどうぞ」

雛はそれだけ言うと、開きかけの戸から中へと入っていった。

そして背を向けたままアリスに、

「お話があります」

と、それだけ言った。

## 第二十話 あの世界へ（後書き）

次、恋愛モノ書きまゝすw  
……たぶん；

## 第二十一話 あてなの秘密（前書き）

小屋へと招き入れられたアリス。

誰もいない小屋の中で、アリスと雛は静かに対峙する。

そして雛はゆっくりと語りだした……

## 第二十一話 あてなの秘密

「話、とはいったいなにかしら？」

用意された席に着くなり、アリスは噛みつくように雛に言った。

「……彼女のことを気になっているのでしょうか？ だからそれをお教えします」

「あてなのこと……」

そういえば、雛はあてなの命の恩人だと言っていたような……

勝手に借りたティーカップにコーヒーを注ぐ雛。

アリスのカップには砂糖とミルクを、

「ブラックでかまわないから」

「そうですか」

入れるのを止めて、今度は何故か自分のカップへ塩を数杯入れた。

「……………」

「ふう……落ち着きますね」

とりあえずアリスは無視して自分のコーヒーを一口すすった。

（塩なんて入れるかしら普通……）

「……今から、少し前のことです」

カップを置くと、雛が淡々とした口調で語りだした。

「私がいつものように山で散歩していると、一人の少女が倒れてるのを見つけました」

「あてなね？」

雛がうなずく。

「外傷こそなかったものの、彼女はひどく衰弱していました。その時偶然この場所を見つけました」

そして雛は一度コーヒーに口をつける。

「広がるゴミの山と、丘の上の粗末な小屋。私も長く妖怪の山を見てきましたが、このような場所があるなんて知りませんでした。とりあえず私は見つけた小屋で彼女を手当てしました。幸い体調はあ



つという間に回復したのですぐに事情を訊けました。彼女、どうやら外から来た人間のようです」

「外？ 幻想郷の外から来た人間？」

「ええ。彼女は幼い時に失くしてしまった思い出を求めてこの幻想郷に辿り着いたそうです」

「失くした思い出って……何度も聞くけどいったいなんなの？ あてなが失くした思い出って？」

「ぬいぐるみ、だそうです」

「ぬいぐるみ？」

アリスが顔をしかめた。

「そこかしこにあるじゃない。これ全部が思い出だというの？」

「ああ、いえ。このぬいぐるみ達は少し違います。いやでも、性質的には同じでしょうか……？」

「一人で進んでないで最初から説明なさい」

「あの、私一応神様なんですけど……」

「それが？」

睨みつけてくるアリスに、雛は苦笑いを浮かべると咳払いをして仕切り直す。

「……こ、こほん。ではまずこのぬいぐるみについて説明しましょう。これらは人間が棄てた思い出の欠片なのです」

「思い出の欠片？ それに、思い出を棄てるってどういうこと？」

「記憶から無くなる、ということでしょうか。誰の記憶にも残らない思い出は在るべき場所を失い、この地へと誘われる……」

「在るべき場所を失った思い出……」

ふと、柵に視線を移す。

この小屋のぬいぐるみは全て、誰かの思い出だったということ……？ それにしても、

「あてなは本当に何者なの？ ぬいぐるみを直すのが趣味の不思議な少女、じゃ納得できないわよ」

すると、雛がカップを置いた。

「彼女は……この場所に棄てられた思い出を直す、思い出の修理人  
なのです」

## 第二十一話 あてなの秘密（後書き）

自分の文章力の無さに絶賛絶望中……

## 第二十二話 修理人の意味（前書き）

あてなの秘密。

それは彼女が幻想郷の外の人間であること。それから、失くした思い出を探していること……

切なさを感じながら話していると、あてなが静かに現れた……

## 第二十二話 修理人の意味

「思い出の修理人……とはどういう意味かしら？」

「そのままの意味です。彼女は棄てられた思い出を集め、それらを直して思い出の持ち主へと返すのが使命です」

「返すのが使命って」

アリスは周囲のぬいぐるみを示した。

「山ほどぬいぐるみが残ってるじゃない。これはどういうこと？」

「……今の人々は、簡単に思い出を忘れてしまうようですから」

悲しそうに目を伏せながら、雛がつぶやいた。

「返す、というのは元の持ち主の元へと帰ることを意味します。これは物理的な意味ではなく、本人の意識の中に思い出を呼びおこさせることを言います。そして、呼びおこされた意識の強さによって、この地のぬいぐるみは浄化され、主の元へと帰ることができます」

「……続けて」

「しかし、最近は思い出を呼びおこしても誰も気に留めないようになっていのです。別の思い出に塗り替えたり、或いは新しい思い出が強すぎて、この子たちが入る余剰が無くなっていたり……」

……この話を聞いているからだろうか？

「この子たちはもう、帰れない子なのです。記憶から消えてしまった思い出は存在価値がありません」

「それをあてなが守っている……と」

ええ、と小さくうなづく。

「それが糸柳あてな。幻想郷の最果てで、誰かが忘れた思い出を、たった一人で癒し続ける孤独な少女……」

「……………」

空のカップをただ茫然と見つめるアリス。

彼女の経緯を聞いて感じたこの虚無感はなんなのだろうか。

切ないような。

悲しいような。

あの天真爛漫な笑顔の裏で、もしかしたら彼女は人知れず涙を流していたのだろうか。

そう思うと、言葉が出なくて……

「ボクは孤独じゃないよ」

ふと、二人の背後からあてなの声がした。

いつ帰ってきたのか、あてなは玄関の前で腕を組みながら静かに立っていた。

「あてなさん……」

「えへへ。ボクは一度だって孤独だなんて思ったことないよ？ 雛ねえちゃんもいるし、アリスともお友達になれたし、それになにより……この子たちがいるもの」

両手で抱えられるだけぬいぐるみを抱きしめ、二人に微笑んでみせるあてな。

眩しいほどの満面の笑みで、ほの暗いこの部屋が一瞬明るくなったような気がした。

「思い出探すのは大変だけど、きっと見つかる。ボクがあの子を忘れてないんだから。忘れられないんだから……」

「あてな……？」

ほんの一瞬の笑顔だった。

急にあてなの顔が悲しそうに歪んで、笑みも消えて、頬に涙が伝って……

「……早く、見つけなきゃ……ね。へへ、でないと、ボクがあの子に忘れられちゃうから……」

アリスも雛も、今はただ、震えるあてなを見つめることしかできなかった……

## 第二十二話 修理人の意味（後書き）

少しお久しぶりです。

花粉症がヤヴァイです。今年に限って目にきました；

いつもは目以外に来るもんだから、ちょっとしたパニックです。

痒くて痒くてたまらない……

皆さんもお気をつけください；

## 第二十三話 友のため（前書き）

彼女のためになにか出来ることはないだろうか。  
アリスは洋館で静かに考えて……  
そして、ゆつくりと立ち上がった。



## 第二十三話 友のため

「……………」

洋館の書斎。

アリスは本を開いたまま、ぼんやりと頬杖つきながら窓の外を見つめていた。

「……………」

「……………アリス？」

人形がアリスの視界を遮っても、アリスはなんの反応も見せない。ただボケーっと外を見つめるだけ。

「邪魔するぜ？」…………アリス？」

書斎の扉をドンと開け放って現れた魔理沙はそんな様子のアリスを見るなり、

「なんだ？ おいアリス？ アリス？」

「…………ヘンジガナイ。ダケドアリスノヨウダ」

「おまえそんなのいつ覚えたんだよ……………」というツツコミはさておき、目の前で大袈裟に手を振ってみたり、髪をちよつと引っ張ってみたりいろいろ試してみた。

…………が、いずれも反応は無し。

「こんなアリス初めて見たな…………まるでホンモノの人形みたいにピクリともしやしないぜ」

魔理沙はうんと深く考えて、

「マリサ。ナニスルキ」

おもむろに取り出した八角形の小さな物体をアリスに向けた。

「至近距離でマスパ撃てば嫌でも反応するだろ？ というわけで恋符マスリースパー」

「上海」

瞬間、魔理沙の首筋に鋭利な刃物が閃いて…………

「ああ！ うそうそ！ マスパなんて撃ったりしないから首筋の包

丁を止め……お、おい！ 今チクつてしたあ！？」

「喧しい。ちよつと考え事してただけなのにずいぶんヒドイことしようとしたじゃない魔理沙？」

アリスの冷たい視線が魔理沙を貫く。

首筋の血を拭いながら苦し紛れに、

「じ、冗談だつて。アタシがそんなことするわけないだろ？ ……で、なに考えてたんだ？」

「たいしたことじゃないわ。ただちよつと感傷にふけていただけ」

「へえ……？ おまえが？」

「私だつてセンチな気分になつてなるわよ」

「意外だな……」

開きっぱなしの本を閉じてアリスが立ち上がる。

そして魔理沙に背を向けて歩き出すと書斎を出ようとする。

「お、おい！ どつか行くのか？」

「ええ。決めたの」

「決めたつて……なにを？」

スツと振り返ると、青い瞳で魔理沙を凜と見据えた。

「あの子の、あてなの力になることよ」

「あてなつて、あの変わったヤツか。アイツのためつて……」

すると、魔理沙は悪戯っぽく口元をほころばせた。

「他人には無関心なお前がねえ……？ いったいどういう風の吹きまわしだ？」

「他人……」

そつと目を細めてアリスはくるりと回れ右。

「他人じゃないわ。……友人よ」

その後ろ姿をニヤニヤしながら見つめる魔理沙に、アリスははたして気がついたのだろうか……？

## 第二十三話 友のため（後書き）

お気に入り登録件数が減りました……

でも、こんなことで一喜一憂して落ち込んでても意味はありませんね。

他の作品を見て、得られる物を吸収して、自分の作品をもっと向上させなくては！

……でもやっぱり悲しいなあ；

## 第二十四話 古物商とダウザー（前書き）

洋館を出発し、二人は魔法の森を進んでいく。

すると、魔理沙には馴染みの古物店に辿り着いた。

店主の香霖と話をしていると、見知らぬ少女が店を訪れた。

## 第二十四話 古物商とダウザー

「しっかしよお。思い出？　だか探すんだよな？　そんなものどうやって探すんだ？」

途中、魔理沙が当然の疑問を投げかけた。

「雛にはアテがあるそうよ。ま、私にも一つ考えがあるのだけれど」  
「考えて？」

「あなたもよくご存じの場所よ」

「……？」

そう言いながらアリスは森の道なき道を進んでいく。

うつそうと茂る木々の合間から、ふと小さな建物が見えてきた。

「これって……」

建物に見覚えのある魔理沙が思わず声をもらす。

それは古い日本家屋で、玄関の前には木の看板が置いてあり『香霖堂』と書かれていた。

「香霖とこの店じゃねーか。ここがなんだってんだ？」

「古い道具を扱うのでしょうか？　もしかしたら、がらくたの中にぬいぐるみが混ざっているんじゃないかと思って」

「思い出をがらくた扱いって……」

「あら、見た目はただのボロボロのぬいぐるみなのよ？　素人が見たら百パーセントがらくたと思うでしょうね」

「いや、香霖は素人じゃないだろ。むしろプロだぜ？」

魔理沙の言葉もろくに聞かず、アリスは店の戸を勢いよく開けた。

「や、いらっしやい」

小さなカウンターの奥で、優しく微笑む銀髪の青年が立っていた。

眼鏡の奥からのぞく同じく銀色の瞳が二人の少女を交互に見つめる。

「魔理沙と……おや、君が来るなんて珍しいね。ようこそ香霖堂へ」  
「おう、邪魔するぜ」

「早速だけど、一つ訊いていいかしら？」

「なにかな？」

彼、もりちかりんのすけ森近霖之助は笑みを崩さずに答えた。

「ここ最近、なにか変わった商品は入荷してないかしら？」

「変わった商品……？ 具体的にどんなのだい？」

「ぬいぐるみよ」

その言葉の直後、なぜか店内がシンと静まりかえる。

魔理沙はいつの間にか勝手に奥の部屋で茶など飲んでるし、アリスはこの不本意な沈黙に顔を真っ赤にさせた。

「……ちよつと。なにか言いなさいよ。なんでここで無言になるのよ」

「あ……いや、急にそんなファンシーな一言が君の口から発せられるとは思わなかったもので」

はははと苦しそうに笑ってみせた霖之介。

いや、魔理沙風に香霖と呼んだ方がらしいだろうか。

ずれた眼鏡を掛け直しながら香霖はあごに手を当て思案する。

ここで少し、簡単に彼の説明をしよう。

もりちかりんのすけ

森近霖之助。

彼は人間と妖怪のハーフであり、魔法の森の一角にこの古物店『香霖堂』を営んでいる。

扱う商品は様々で、日用品、雑貨に本や機械、果てはパソコン等の電化製品やら物騒な兵器まがいの代物など……

例をあげたらキリがないので割愛。

なお、これらの商品は全て彼自身が探して得たもの、つまりこの珍妙な品ぞろえは全て彼自身の趣味をそのまま反映したようなものである。

「なにか特殊な能力があるぬいぐるみなのかい？ 例えば夜になると動き出すとか。水をかけると凶暴になるとか……」

「そんな物騒なもの探さないわよ。まあ……動く可能性はあるかしらね」

「動くぬいぐるみ……ねえ」

店内のすみにあつたジャンク品を陳列している箱を漁りだす香霖。あれでもないこれでもない品物を適当に放り投げ、あたりにホコリをまき散らす。

巻きあがるホコリに、アリスは心底嫌そうに顔をしかめる。

「もう少し、丁寧に出来ないかしら？」

「ごめんごめん。……ううん、でもやっぱりそれっぽい物は見つからないな。力になれなくて申し訳ない」

「いえ、結構よ。そこまで期待していなかったもの」  
ばつさりである。

がつくしと肩を落とす香霖はすぐごとカウンターへと戻っていく。  
「ううん……なにか良い手はないのかしら？ 例えば、探し物を生業とするような人物とかいないかしら……」

「ごめんください」

声の方へアリスが振り返ると、そこには見知らぬ少女が立っていた。短めのダークグレーの髪と飛び出した丸耳。

暗い色調の衣服の端から、なぜか尻尾を揺らして静かにたたずんでいる。

「つと、先客がいたのか。これは失礼した」

アリスと比べてずいぶん小柄な少女は、堅苦しい言葉を並べてしゃべった。

似合わない。

全然似合っていない。

「あなた……誰？」

「ほう。人の名を聞くのであれば、まず自分から名乗るのが礼儀ではないかい？」

ツ、生意気な……

「アリス・マーガトロイド。さ、次はあなたの番よ」

すると少女はアリスを見上げ、

「私はナズーリン。主人に頼まれて探し物をしているところさ」

平坦な声音で少女は答えた。



## 第二十四話 古物商とダウザー（後書き）

相変わらずバレバレなタイトルです……

探し物、というと彼女以外浮かびませんしね；  
そろそろ次のお話を考えなきゃ。

## 第二十五話 探し物はなんですか？（前書き）

香霖堂を訪れたナズ リン。

ダウジングを得意とする彼女の能力を聞いた途端、アリスは協力を求めた。

協力を拒否し店を去ろうとするナズ リンに、アリスは強引に人形をけしかけた……

## 第二十五話 探し物はなんですか？

ナズ リンと対峙するアリス。

すると、それを見物に來た魔理沙が彼女を見て表情を変えた。

「おまえ……いつか見たネズミじゃないか」

「知り合いなの？」

魔理沙はナズ・リンを指差しながら、

「たしか宝探してたネズミだったな。なんでこんなトコ來てんだおまえ」

「主人の探し物を頼まれてな。私は最初にここを訪れるようにしているのさ」

氣取ったような言い方で答えるナズ リン。

生意気なネズミなこと……

アリスはいちいち堅苦しい彼女が妙に鼻持ちならなかった。

ナズ リンは直角に曲がった奇妙な棒を示すように振りながら

「ロッドはたしかにここに反応したのだがね。どうやらまた違うものが反応したみたいだ。特に他に用もないし、私はここで失礼するよ」

そう言った。

「ダウジングだっけ？ ご苦労なこつた……」

「ちよつと待った」

背を向けるナズ リンをアリスが呼びとめた。

「なにかな？」

「いまダウジングと言ったわね？」

「ああ。言ったぜ？」

「私の力だが、それがどうかしたのかい？」

ダウジング。

それは地下を流れる水や貴金属の鉋脈のような、目に見えない隠れたものを見つけ出す手法。

主に振り子や金属の棒などを用いて探すのが一般的で彼女の棒もそれと同じものなのだろう。

いつぞや、なにも見えない道路でダウジングをしたら不思議な飴を拾った、なんて話も聞いたことがある。

「ちよつと協力してくれないかしら？　ぜひともあなたの力で探してほしいものがあるのよ」

「悪いね。私にそんな暇はないのさ」

さつさと帰ろうとするナズ　リンに、アリスはふい手を宙に上げた。  
「ッ!？」

玄関を少し越えたところで、ナズ　リンは大量の人形に囲まれた。前後左右どこを見ても、数百の人形が陣形を成して舞っている。

「……どういふつもりだい？」

「見ての通りよ。面倒だから力ずくで頼んでみようと思ったの」

「おいおいさすがにやり過」

ヒュンツと風を切る音とともに、魔理沙の足元にナイフが突き刺さる。

「面倒は嫌いな。ネズミ一匹ぐらい無理やりねじ伏せて従わせるまでよ」

「キャラ変わってないか……おまえ」

全身からあふれる殺気をものともせずナズ　リンは不敵に笑った。

「簡単にねじ伏せられるとも思ってるのかい？　やれやれ、人間はこれだから困る。……ネズミを甘く見ると死ぬよ？」

「戦符『リトルレギオン』」

取り出した符を握りながら手を踊らせる。

すると、ナズ　リンを囲んでいた人形がまとまりいくつかの小隊となった。

「ファンネルシフト!」

号令とともに、人形の小隊がV字型に陣形をとって突っ込む。

襲いかかる人形部隊を、ナズ　リンは直角に曲がったロッドで冷静にいなしていく。

右、左、上からも背後からも襲いかかる人形に、ナズ リンは顔をしかめた。

「シフト、デュアルウェッジ！」

V字型の陣形を崩すと、人形は五体でまとまり、前に三体、後ろに二体という陣形へ変形した。

「おゝ、ずいぶんとまあどんぱちやつてんなあ……」

「出来たら、店の前でやらないでほしいんだけど……」

なんて言いながら、二人の戦闘をのんびり見ている魔理沙と香霖。飛び交う人形と、それを払いのけるナズ リン。

なかなか白熱した戦い。

魔理沙は居間から持ち出した煎餅なんぞばりばり食べ始める。

「あ、ずるいぞ魔理沙。僕にもくれよ」

「ん？ もうないぞ」

「目の前で堂々と噓つくな。袋握りしめてるじゃないか」

「しゃゝねゝなあゝ」

呑気なものである。

「この！ くうッ！ キリがない！？」

「ウェッジシフト！」

逆V字型に密集した人形がナズ リンに向かって突撃。

さながら巨大な矢のようにも見える。

いなしきれない攻撃に、ナズ リンもポケットから符を取り出し弾幕で応戦する。

「守符『ペンデュラムガード』！」

「ネズミの癖に……！ いい加減倒れなさい！」

サツと右手を掲げ、声高らかに新たな号令をかける。

「グランドアロー！」

人形の小隊は一行を成し、目標を定める。

「こ、こんな量で突撃されたら……！」

「突撃！」

全方位から突進する人形にナズ リンは恐怖の表情を浮かべ、成す

すべなくその集中砲火を浴びた……

「なあ香霖」

「なんだい？」

「オウ バトルだったな」

「ああ…… 64の？」

## 第二十五話 探し物はなんですか？（後書き）

見つけにくいものですか〜とか歌を連想した人は、俺のお気に入り登録件数×回腹筋してくださいw

地味に最後の香霖と魔理沙のやり取りが気に入ってます。

## 第二十六話 勝者の特権（前書き）

こてんぱんに打ちのめされたナズ リン。

不本意ながらも協力することを約束し三人で妖怪の山へと赴く。  
途中雛と合流し、あてなの小屋へと向かった。



## 第二十六話 勝者の特権

「ぎゃふん……」

「今時そんな言葉言う人いないわよ。さ。協力してもらおうよ?」  
こてんぱんに叩きのめされたナズ リンに容赦なく声をかけるアリス。

目をぐるぐるさせるナズ リンの襟首を掴み、ずるずると香霖堂へと引っ張っていく。

「うう、強すぎる……」

「やれやれ。奥から救急箱持ってくるからちよつと待ってて」

香霖が用意してくれた救急箱で簡単な応急処置を施すと、アリスは用件を話した。

「思い出の搜索……? そんなものを探すのか?」

「ええ。あなたの力は探し物を見つける程度の能力なのでしょう?」  
なら、そういったものも見つけられるのではなくて?」

「ううむ、たしかに探せるが……」

「なにか不都合でも?」

「そんなもの探したことなどないからな。はたして見つけられるかどうか……」

絆創膏をいじりながらナズ リンは自信なさげに言った。

「実際に探すのはぬいぐるみよ。それぐらい、あなたなら造作もないでしょう?」

「まあ……」

しぶしぶうなずくナズ リン。

「わかった。負けたのは事実だし協力するよ。じゃあ、まずはそのあてなという人に会わせてくれないか?」

「あ……そうね。会わせる……か」

「ん? なんか問題あるのか?」

魔理沙の言葉にアリスは少し苦い顔をした。

「あの場所への行き方が未だにハッキリしてないのよ。この前は偶然上海が飛び出したから行けたようなものだし……」

「雛を探せばいいだろ？」

「妖怪の山は広いのだから、簡単には探せないわ……あ」

二人の視線がナズ リンに集中する。

彼女も観念した様子で大きなため息をついた。

「その雛も探せというのだろうか？ やれやれ。人間はネズミ使いが荒いなあ……」

「敗者なのだから当然よ。そうと決まれば、さっそく行きましょうか」

そしてアリスは店主である香霖になにも言わずに店を出ていった。まいった。

「……ああ、えと、みんな気をつけてね」

「おう。また今度な」

「失礼するよ香霖殿」

店内が空っぽになると、香霖は静かにため息をついた。

妖怪の山に三人が辿り着いたところには、日は西に傾いて鮮やかなオレンジ色に染まりつつあった。

「それで、雛はどこにいるんだろうな？」

「少し待て」

ナズ リンは胸元にぶら下げていた小さなペンダントを掴んで宙に振るった。

夕日を映して何度かきらめくと、ペンダントから一筋の光が現れる。その光はまっすぐ森の中へと向かって伸びていた。

「この先にいるってのか？」

「いるというか……」

「こっちに来てるじゃないの」

アリスの言うとおり、茂みの向こうからがさと物音を立てながら紅色の少女が三人の目の前へと飛び出した。

「あらあら？ またまたあなたたちなの？ ……今度は知らない顔もあるようだけど」

「ナズ リンだ。訳あってこの者たちの手伝いをするようになった」「そうなの？ それはご苦労様なこと」

「今からあなたにも協力してもらおうよ」

「私も、ですか？」

不思議そうにアリスを見つめる雛。

事情を説明しようとしたところで、なぜか雛は手をポンと叩き、

「ああ、あてなさんのことですか。いいですよ。ご案内します」  
クスクスと笑いながら森の奥へと案内してくれた。

「アリスさんって、けっこう優しいんですね？ フフッ」

「……別に優しくはないわよ」

「おゝ照れてやんの。ホントに珍しいなあ？」

豪快に笑おうとした魔理沙に白刃が煌めく。

それ以上、魔理沙はなにも言わなかった……

## 第二十六話 勝者の特権（後書き）

花粉症で目がピンチです……

鼻水もくしゃみも鼻詰まりもキツイ；

## 第二十七話　じゃんけんorくじ引き（前書き）

あてなの小屋へと訪れたアリスたち。

ナズ　リンの能力で調べた結果、ある場所を分かれて搜索することとなった。

意気揚々とチーム分けの準備をする魔理沙とあてなに、アリスは思わずため息をもらした。

## 第二十七話　じゃんけんorくじ引き

「それでこんな大所帯に……」

玄関の前で、あてなは呆氣にとられていた。

優しく微笑む雛と、堅苦しく挨拶したナズ　リン。それからそっぽ向いてるアリスに、なぜか全身切り傷でボロボロの魔理沙。

「えと……なんで魔理沙はそんな恰好に？」

「目の前で辻斬りにあつたんだぜ……目の前で」

「ホント不思議な話ねえ……」

アリスが明後日の方向を向きながらつぶやいた。

「つ、辻斬りって……あの山いつからそんな物騒になったの……」

「ホント物騒な山ね。魔理沙も注意しなさいよ？」

主に言動で、とアリスは魔理沙にだけ聞こえるような小声で付け足す。

「は、ははは……あ、上がってもいいかな？」

「どうぞどうぞ。でも、まずは魔理沙の怪我を治さないかね」

「それで、なにかご用？」

人数分のお茶を注ぎながらあてなが訊ねる。

「あなたの思い出のことで、話があるの」

答えたのはアリスだった。

「彼女、ナズ　リンと言つてね。探し物を見つける程度の能力を持つているの。この力を使えば、あなたの思い出も見つかるんじゃないかと思って」

「え、ホント!？」

身を乗り出すあてなに、ナズ　リンは小さくうなずいた。

「事情は聞いたよ。思い出を探すなんてのは初めてだが……早速やってみようか」

「お、お願いします!」

机に頭ぶつけそうぐらい勢いよくお辞儀したあてな。

あ、ぶつけた。

「少し、いいかい？」

「へ？」

ナズ リンの小さな手があてなの額に触れる。

瞳を閉じると淡い光があふれ、ぼんやりとあてなを包みこむ。

「不思議なネズミさんですねえ」

その様子を全員でまじまじと見つめていると、光がゆっくりと消えていった。

「……………どう、ですか？」

「……………」

ナズ リンはボーっとしたままにも答えない。

あてなを見つめたまま、無言で立ち尽くしていた。

「ちよつと聞いているの？ …… ナズ リン？」

「あ…………… ああ、すまない」

声のトーンを下げて答えるナズ リン。

寂しそうな顔をしているのは、あてなの記憶に触れたせいだろうか。

「ど、どうですか？ 手がかりとか見えました？」

「ああ…………… その前に一ついいかい？」

「なんですか？」

なぜか頬を染めながら、あてなから顔をそむけて、

「ティツシュ…………… もらえないだろうか」

涙もろいネズミだこと。

「…………… で、結論を言いなさい結論を」

苛立つアリスがナズ リンをにらみつける。

鼻のてっぺんがひりひりしているせいからか、時々指でかきながら

ナズ リンは語りだした。

「いくつか浮かんだ場所があるから、そこを探していけば見つかるかもしれない」

「かもしれないって、なんだ？ 見つからない可能性もあるのか？」  
魔理沙の横槍。

ナズ リンは目を伏せがちに言った。

「今回は少し、自信がない。自分でも不思議なんだ。こんなのは初めてだね」

「あの、浮かんだ場所ってどこなんですか？」

ナズ リンは三か所、と指を立てた。

「無縁塚とこの妖怪の山。それから……」

「それから？」

「名前はわからないが……豪華な紅いお屋敷。そこに住んでる女の子が抱いてる」

「紅魔館ね。三か所となると、全員で手分けした方がよさそうね……」

……

「どう分けるか……悩みますね」

すると突然魔理沙とあてながガタつと立ちあがった。

「めんどくせーからじゃんけんだぜ！」

「くじ引き！ くじ引きがいい！」

「……好きにしてちょうだい」

意気揚々と腕をまくる魔理沙と、どこから取り出したのか謎の割り箸にマジックで色を塗り始めるあてな。

二人の突飛な行動に、アリスは大きくため息をついた。



## 第二十七話 じゃんけんorくじ引き(後書き)

ちよつと遅くなりました；

あしたも更新しますよゝ

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

## 第二十八話 無縁塚チーム アリス&あてな（前書き）

くじ引きとじゃんけんの結果、アリスとあてなは無縁塚へと向かう。  
見慣れたゴミ山とは違い、なんの声も聞こえないゴミ山。

そんな中、あてなは半壊したピエロのぬいぐるみを見つけて飛びだした。

## 第二十八話 無縁塚チーム アリス&あてな

じゃんけんとかじ引きの結果、アリスはあてなとともに無縁塚へと向かうこととなった。

「魔理沙が余計なことしなければ、もう少し早く出発出来ただけど」

「あんな奥の手があるなんて知らなかった……」

「真に受けなくてもいいわよ。あんなの反則よ反則」

無縁塚。

幻想郷に無縁の者が葬られる寂れた墓地。

名もなき者が眠る墓標のそばには紅い彼岸花が死者への手向けのように咲き誇っている。

と言っても、用があるのは墓地ではなくその奥にあるゴミ捨て場。

石を置いただけの粗末な墓標の合間を歩いていくと、やがて生臭い臭いが立ち込めてきた。

「臭いですう……」

「言われなくてもわかってるわ」

鼻につく刺激臭に顔をしかめる二人。

正直、アリスはハズレを引いたと心の中で思っていた。

「あのネズミ……仕返しのもりかしら」

戻ったらぐうの音も出ないほどに痛めつけてやろうか……

そんなことを考えながら歩いていると、目的地であるゴミ捨て場を見つけた。

木くず、鉄くず、それからなにに使うのかわからない機械の部品。

あてなの小屋のゴミ捨て場より規模こそ違うものの、ゴミの内容はほとんど同じだった。

「あてなはここに来たことあるの？」

鼻をつまみながら、あてなはうつろなうなっていた。

「来たことあるような、ないような……？」

辺りを何度か見まわすが、特にこれといって変わった様子はなかった。

「……ここ、なんか嫌だな」

「私も長居はしたくないわ」

「うつん、そうじゃなくて……」

あてなは瞳を閉じて続けた。

「ここ、なんにも聞こえない。人形もぬいぐるみもあるのに……」

ゴミ山の端っこに、小さなぬいぐるみと人形が捨ててあった。

もうほとんど形を成していない。

五体満足な人形など一つも見当たらなかった。

「あの子たち見てると、すごく寂しい気持ちになる。……ボクの思

い出も、あぁなってたら……」

「そんなこと……」

なにか言おうとしたが……なんて言えばいいのか、わからなかった。今無理に声をかけたら、逆にあてなを傷つけてしまうんじゃないだろうか。

「あの、あてな……」

そつと手を伸ばそうとしたとき、

ダ、れカ、イルの？

「ッ!？」

突然、あてながゴミ山に向かって飛び出していった。

あまりの速さに、アリスの反応が一瞬送れたほどだった。

「ちよつと、あてな!？ どこに……!」

飛び出したあてなは、今にも崩れそうなゴミ山の上を軽々飛び越えて、あつという間にゴミ山の奥の方へと消えてしまった。

まるで獣のような速さだった。

アリスがあてなの向かった方へ飛ぶと、彼女は一番奥に捨てられていた古いベッドの上に立っていた。

「声……聞こえたのね？」

あてなは無言である場所を指差した。  
そこには、小さなピエロのぬいぐるみがポツンと横たわっていた。  
半分焼けただれた顔。

派手な彩色の衣装はほとんど黒ずんでいて、腕どころか足もない。  
まるで火葬中に抜けだした死体のようだ。  
自分でも嫌な例えだが……

そんなボロボロのぬいぐるみに、あてなはそつと手を差し伸べた。  
「……………」

さすがのアリスにも、手遅れだとわかった。

あてなの力を使ってもこれはもう……

「……………」

「あてな…………？」

あてなはぬいぐるみの前でひざをついた。

ローブが汚れるのかもかわず、両手についてうなだれる。

「声を聞いて、飛び出して、抱きしめて、修理する…………… たったそれ  
だけ……………それだけなのに……………」

ぬいぐるみの頬に、あてなの涙がこぼれ落ちた。

「もう……………声が、聞こえない……………」

「……………」

手を伸ばそうとして、止めた。

なにを言っても、今の彼女を慰められることは出来ないと思ったか  
ら。

ただ、うなだれるあてなを呆然と見つめることしか出来なかった。

ヤサシい、女ノ子だネ。

アリスとあてなの他に誰もいないはずの無縁塚に、声が響いた。

「誰！？」

アリスは符を握りしめながら全方位に意識を向ける。

だが、誰の気配も殺気も感じない。

気配を消してるのか、それとも……

「……君の声なの？」

朽ち果てる寸前のぬいぐるみは、あてなの腕の中で柔らかな光を放っていた。

温かいような、優しいような……

ぬいぐるみはゆっくりと宙に浮かぶと、崩れた顔で二人を交互に見た。

サイゴに、きミたちみたいナ、やさしい人に触れてもらえて、嬉しかったヨ。

「ま、待って！ 最後って、どういう……！？ ねえ！ 返事してよ！？」

あてなが懇願するように叫んだ。  
柔らかな光に包まれたぬいぐるみは小さくうなずいた。

ぼくみたいな、捨てられたヌいぐるミはね、持ち主ニ忘れ去られテしまつたら消えるんだ。

思い出ガ消エレばぼくも消エル。

存在スル理由ガ、ナイからネ……

「だ、だったらボクと一緒にいようよ！ 家に仲間が、友達がいっぱいいるから……ッ！」

あてなの言葉が突然途切れる。

目の前で浮かぶ光が、少しずつ弱くなっていったから。  
恐らくぬいぐるみの意識の限界ということだろう。

光は明滅を繰り返し、だんだんとぼやけ始める。

それじゃ、そろそろ行くよ。

人ト話しヲしたら、眠ク、なつテ……

「あ……」

光が、静かに消え去った。

静寂が二人を包みこむと、アリスは声をかけようと口を開きかけた。

「あの、あてな……」

「……ゴメン。ちょっと、ちょっとだけ一人にしてくれないかな……」

……

「……わかったわ」

それ以上何も言わず、アリスはそつとその場を後にした。

「存在する理由が無いなんて、悲しいこと言わないでよ」

瞳を涙で真つ赤にして、あてなは灰色の空を見上げた。

「理由なんて、いらないでしょう？　だってあなたが、あなたそのものが思い出なんだから……」

第二十八話 無縁塚チーム アリス&あてな（後書き）

思い出に存在する理由は知らない。

自分で書いててちよつとドキツとしました。

その、上手く言葉に出来ないのがものすごく歯がゆいのですが……

というか、いつの間にこんな重いお話になったんだろう……；



## 第二十九話 妖怪の山チーム 雛&ナズ リン（前書き）

雛とナズ リンは妖怪の山へと向かった。

大滝の前まで辿り着くと、山の哨戒を担う天狗と遭遇する。

不思議なことに、ナズ リンのロッドは彼女に反応していた……

## 第二十九話 妖怪の山チーム 雛&ナズ リン

妖怪の山。

低級の妖怪から天狗のように高位な妖怪まで幅広く生活している広大な山。

そんな場所で、一人の少女はくると回りながら、もう一人の少女は静かに歩いていた。

「……………」

「今日も空気がきれいですねえ」

雛はぼんやりつぶやいた。

「……………」

そばを歩くナズ リンは無言。

両手にはダウジングで使うための直角な棒を握りしめていた。

「そ、それにしても、魔理沙さんのじゃんけんは驚きましたねえ？

あんな手を使うなんて予想外で……………」

「……………」

「そ、そういえば、ナズ リンさんと二人っきりなんて初めてですねえ……………」

「……………」

「あ、その、えと……………」

「……………」

気まずい、気まずすぎる。

さつきからいくら話しかけてもナズ リンはちっとも答えてくれない。

号泣寸前の雛はためしにしゃがみ込んで、

「しくしく……………さめざめ……………」

「……………」

気を引くための嘘泣きだったが、そろそろ本気で泣きそうになった。いや、もう泣いていいんじゃないかな……………」

「ん？ なにか反応が……」

雛がお気に入りへのハンカチ用意した瞬間、ナズ リンが顔を上げた。直角の棒が突然動き出し、二つの棒が反発しあったかのように互いが反対方向を向いた。

「あら、ここは……」

轟々と流れ落ちる大滝。

真下に叩きつけられた水しぶきが周囲一帯に広がる。

「妖怪の山名物、紅の大滝……ですね」

「ほう。そんな風情ある名前なのかい？」

「いえ、今私が考えました」

「……センスないね」

「ひどい！？」

自信あつたのに、と叫ぶ雛を尻目に、ナズ リンは岩場を降りて滝の目の前へと飛んだ。

滝の冷たい水は清涼感にあふれておりとても清々しい。

空気を胸一杯に吸い込んで深呼吸。

主人にも見せてあげたい、とこっそり思った。

「その二人！ なにをしている！」

どこからともなく響いた少女の声に、ナズ リンは全身を緊張させた。

「誰だ！？」

木々の揺れる音に視線を動かすと、そこには一人の少女が細い木の上に立っていた。

白を基調とした道着のような衣服を身にまとい、腰には太刀を帯剣していた。

凜とした瞳が二人を見据えると、

「ここだなにをして……アレ？」

雛を見て困惑したような表情になった。

「あらあら、桜ちゃん」

「……桜ちゃん？」

椈と呼ばれた少女は軽々と木を降りて、二人の前へと歩み寄ってきた。

「雛さんここでなにをしてるんですか？ ……それと、この方は？」  
不審そうにナズ リンを指差した椈。

「ナズ リンさんっていうネズミの妖怪さん。探し物を見つけるプロなんですって」

「……おい、こいつは誰だい？」

今度は逆にナズ リンが椈に向かって指差した。

「私はこの山を哨戒している、犬走椈いぬはしりもみじと申します」

椈は一度姿勢を正してから礼儀正しく会釈してみた。

「哨戒……？」

「彼女はこの山に住む天狗の一族です。妖怪の山の哨戒が彼女の任務です」

「ふーん……？」

訝しげな表情で見つめるナズ リン。

哨戒を任されている天狗……つまり下級の妖怪ということか。

「それで雛さんたち、ここになにか御用なんですか？」

「はい。ちよつと探し物をしていまして。この近くで彼女の道具が反応したんですが……」

「ふむ……また故障かね。どうにも調子が悪い」

直角の棒を調子確かめるみたいに振り回しながらつぶやく。

別の道具を使おうとしたとき、椈が身を乗り出してナズ リンに訊ねた。

「それ、なんですか？」

「これはダウジングロッド。探し物を見つけるための特殊な道具で……ッ？」

その時、握りしめていたロッドが大きく反発し合い、強い反応を見せた。

「え、なんですか？ なにに反応してるんですか？」

「……………」

「……え、私ですか？」

こくんと無言でうなづくナズリン。

信じられない、といった様子でなんとも複雑な表情になっていた。

「……これは本格的にマズイ。一度戻って新しい道具を持ってこないと……」

「どうして椀ちゃんに反応するんですかね……あれ？」

ふと、雛はあることに気がついた。

「椀ちゃん、そんなもの付けてましたっけ？」

雛が指差したのは、椀の腰の太刀。

その柄の部分にぶら下がっていた、紅葉をあしらった洒落たストラップ。

すると椀は手に取り、懐かしむように優しく握りしめた。

「これは……私の大切な友人の忘れ物です。今はこの幻想郷にいませんけど、いつか渡せるようにと、私が預かっているんです」

その横顔はとても寂しそうな顔をしていた。

「……なるほど。それは君にとっての宝物だということか。ロッドの故障ではなかったようだ」

「でも、ちよつと寂しそう……そうだ」

そんな椀に雛はそつと近付いて、後ろから両手を広げた。

「へ？ え、えええ！？ ひ、雛さんなにを！？」

「ん？ 椀ちゃんの厄をとってあげようかと思って？」

「や、厄なんてありませんよ！ そ、その恥ずかしいから雛さん早く離れ……ちょ！ いまどこ触っ！？」

「……こほん」

抱きつく雛をどけると、椀は全身を紅く染めながら肩で息をいっていた。

……ちなみに抱きついた本人は心底残念そうな顔をしている。

「そろそろ私たちは失礼しようか。ここでは他に手がかりも得られそうにない」

「そうねえ……それじゃあ行きますか。椀ちゃん、またね？」

「……道中、お気をつけて」

それだけ言々と柊は森の中へと消えていった。

雛とナズ リンは柊とは反対方向へと歩き出した。

「でも、あのストラップ……」

「それがどうかしたのかい？」

「ううん……なんだが、幻想郷の匂いがしなかったような……」

「……？ 幻想郷の匂い？」

「気のせいかなあ……？」

ぼんやりとつぶやいた雛はそれ以上はなににも言わなかった。

## 第二十九話 妖怪の山チーム 雛&ナズ リン（後書き）

祝！ お気に入り登録件数30件！

アセロラレモンティーを飲みながら作業頑張ってます。

ちなみに、このストラップは前作のキーアイテムです。

詳しいことは紅葉記を読んでいただければわかりますよ。

……なんて、ちょっぴり宣伝してみたり。

### 第三十話 紅魔館チーム 魔理沙（前書き）

単独で紅魔館へと向かった魔理沙は、昼寝に定評のある門番に行く手を阻まれてしまう。

しかし、戦闘する寸前に空から深紅の光が降り注ぎ、門番を木っ端みじんに吹き飛ばしてしまった。

魔理沙が空を見上げると、そこには無邪気に微笑む少女の姿があった。



### 第三十話 紅魔館チーム 魔理沙

見慣れた……というよりは見飽きた紅いレンガ造りの大きなお屋敷。今、魔理沙はその屋敷の門の前で少し考え事をしていた。

「アイツ、たしか女の子が抱いてるって言ってたよな……」

紅魔館の住人は全員知っている。

その中でぬいぐるみを抱くようなヤツは一人しか浮かばない。

この館を守る瀟洒なメイド

……ノーだ。

館の主である吸血鬼の少女。

……恐らくノーだ。

図書館でひきこもるアイツ。

……ノー、いやワンチャンスあるかもしれん。

となると残るはあと一人。

正直、魔理沙にとって微妙に厄介な存在。

「アイツならまあ……普通に抱いててもおかしくないよなあ？ ……」

……原形をとどめているかどうかはともかく」

脳裏に浮かんだのは、少女がぬいぐるみを愛おしげにきゅっとしてドカーンの図。

布が、綿が、部屋中にばらまかれてひらひらと舞う。

「それがあてなの思い出の品じゃないと願いたい。……そもそもどうしてアタシが一人なんだか」

もちろん、魔理沙が紅魔館を担当した原因はじゃんけんとかじ引きの結果である。

まずじゃんけん。

アリス、あてな、魔理沙、雛、ナズリン。

この五人を均等に三つに分けようとすると、必ず誰かが一人になる。「うし、勝ったヤツから順番に抜けていこうぜ。そんじゃ行くぞ？

「じゃーんけーん……」

ここで、魔理沙はじゃんけんにおけるある『禁じ手』を放つ。それは相手がどんな手を出しても絶対に勝つ、じゃんけんにおける最強の一手。

あまりに危険な禁じ手であるため、リアルファイトに発展する可能性もあるが……この面子なら大丈夫だろう。

「……ほい！」「……」

「……魔理沙、それはなに？ チョキの出来そこない？」

「あ？ アリス知らねえのか？ これ一つでグー、チョキ、パーの三種類を兼ねる最強の一手でだな」  
殴られた。

容赦なくグーで全力で殴られた。

たんこぶから煙が出るんじゃないかと思うぐらい痛かった。

「魔理沙は自動的に負けていいだろう。次は私たちだけでじゃんけんをしてだな……」

その後あてなの作ったくじ引きをやることになる。

ちなみに、じゃんけんでメンバーの組み合わせ。

くじ引きで場所を決める。

そして、結果魔理沙は単独で紅魔館へ向かうこととなったのだ。

「……ま、いいか。今回は一人の方が都合がいいし」

一度帽子をかぶり直してから、魔理沙はなんの断りも無く紅魔館の門をくぐった。

「ちよつと待ったあああ！？」

背後から鋭い飛び蹴りが飛んできた、が魔理沙はちよつと身を反らして回避する。

轟音とともに命中した場所に小さなクレーターが出来上がっていた。  
「珍しく起きてやがる……」

「失礼な！？ 私はいつでもこの紅魔館の門を守ってますよ！」

目の前で拳闘着に身を包んだ少女が魔理沙を睨みつけてきた。

拳闘の構えをとる少女は、パツと見武術の達人のようにも見える。

……その素性を知らない人間が見れば、の話だが。

「貴方！ いい加減無断でこの紅魔館に足を踏み入れるの止めてくれませんか？ 正直門番としての面子がありません！」

「そりやおまえいつつも寝てるじゃねーかよ……」

「ち、違います！ あれは修行の一環で瞑想をしながら警備を……」

「よだれ流しっぱなしの瞑想なんか聞いたことないぜ？」

「ぐぬぬぬ……」

返す言葉ないんかい……

半ば呆れながらも、魔理沙は応戦すべく符を手にした。

グツと両手でポーズを取りながら、じりじりと間合いをうかがう少女。

全身にそつと力を込めて魔理沙も少女を見据える。

勝負は一瞬で決まる……いや、決める。

魔理沙は口の端でニツと不敵に笑った。

少女が駆けだしたその瞬間を狙って符を放てばそれで終わる。

そして、少女が勢いよく地を蹴った。

「今だ……ッ！」

符を掲げ詠唱を始めようとした瞬間、それは起こった。

突然上空から深紅の光が降り注ぎ、飛びかかってきた少女の脳天に直撃した。

「覚悟しなさああんにやあああ！？」

激しい爆音と煙が周囲を包みこむ。

思わず魔理沙も顔を覆いながら伏せて身を守った。

「……まさか、な」

光が降り注いできた空を見上げる。

灰色の空の真ん中に、人影が見えた。

深紅のスカートと美しい金髪。

そして、背には不思議な形状の翼があった。

鳥が空を飛ぶ翼とは明らかに違う、綺麗な宝石のような翼だった。

人影は魔理沙を見つけると、一気に降りてきた。

「魔理沙、魔理沙ー！」

降り立った人影は無邪気な笑顔で魔理沙に抱きついた。

魔理沙の胸の中でうりうりと顔を埋める。

「おー、やっぱりフラン……た、助けてくれたのか？」

「うん！ 魔理沙、変なのに襲われてたから！」

「変なのって……」

一応、変なのの方を見つめる。

時折ぴくぴくと体を震わせているから死んではいないだろう……多分。

「魔理沙！ 遊びに来たの？」

「んあ？ あーまあ……そんな感じか」

「ホント！？ わあーい！」

無垢な笑顔を振りまいて魔理沙の周囲をびよんぴよん跳ねて喜ぶ少女は、魔理沙の手を強引に掴むと屋敷の中へと引きずるように歩き出した。

### 第三十話 紅魔館チーム 魔理沙（後書き）

調整してたら少し遅れちゃいました；

新作はオールキャストでいってみようか……と、無謀なコトを考え  
てます。

たぶん……無理だなw

### 第三十一話 紅姉妹（前書き）

フランの案内で、魔理沙は館の主の部屋へと侵入する。

どうやら姉であるレミリア・スカーレットがぬいぐるみを持っているらしい。

部屋でぬいぐるみを探していると、二人の前にレミリアが現れた。

### 第三十一話 紅姉妹

「魔理沙、魔理沙！ なにして遊ぶ？」

部屋に入るなり、少女は魔理沙の服の裾をぐいぐい引っ張りながら何度も訊いてくる。

「お、落ち着けフラン。ちょっとは静かにしないとだな……」

少女の名はフランドール・スカーレット。

この館の主の実妹であり、同じく吸血鬼の少女。

過去屋敷内で監禁されていたこともあるせいか、やや気が触れていて不安定な面もあったが、最近は様々な人や妖怪と触れたこともあってか、表情も豊かになってきたような気がする。

何度も紅魔館に訪れている魔理沙は、会うたび飛び付かれているほど懐かれていた。

「そうだフラン。おまえぬいぐるみとか好きか？」

「ん？ ぬいぐるみ？」

部屋をざっと見まわしてみたのだが、特に変わったぬいぐるみは見当たらなかった。

というより、そもそもぬいぐるみを見かけない。

「ぬいぐるみ……ぬいぐるみ……？ 私持つてないよ？」

「あれ、そうなのか？ てっきり私は……」

魔理沙のアテが外れた。

フランのことだから、寝るときに一緒に抱いてるのかと思ったのだが……

「あ！ でも、お姉ちゃんなら持つてるよ？」

「……は？」

フランはニツコニコしながら答えた。

ほこり一つないほど完璧に掃除された廊下をこっそり歩きながら、魔理沙はフランの案内でこの館の主の部屋へと向かっていた。

「だ、大丈夫なのか？ さすがにレミリアの部屋はマズイと思うんだが……」

「ヘーキヘーキ！」

突き当たりのドアをノックもせずに関けるフラン。

一応身構えておいた魔理沙だったが……部屋には誰もいなかった。

「うへえ……ついに入っちゃったよ。紅魔館のボス部屋」

「んつとねー、たしかこの辺り……」

早速フランはベッドの下にもぐりこんだ。

魔理沙は誰か来ないか心配でドアの近くで注意を払っている。

「ふ、フラン。見つからないなら無理して探さんでもいいぞお……」

……

「ちよつと、待っててえ……」

片腕突っ込んでなにかと格闘しているフランに小声で声をかけてみたが、探すのに夢中で声に気づいていない。

このままドア開けっぱなしでメイド長、あるいは部屋の主に見つかったら……

「や、やっぱいいフラン！ 戻ってこい！ 部屋に戻ってお菓子でも食べようぜ！……？」

「ん？ お菓子？ 食べる食べるー！」

ぼふつと魔理沙に飛び込むフランの頭を撫でる魔理沙。

妹が出来たみたいで若干嬉しいが……さすがにこんなデンジャラスな妹はご遠慮したい。

そのまま抱えて部屋を出ようとしたその時、

「ワタシの部屋で、なにをしているのかしら魔理沙……？」

「げ……レミリア」

ドアの前には、小さな体で仁王立ちする少女がいた。

薄い桃色のドレス、桃色の帽子からのぞく艶やかな銀の髪。

そして幼い外見に似合わない、鮮血にも似た紅い色の瞳。

レミリア・スカーレット。

紅魔館の主にしてフランの姉。



スカーレット・デビル  
通称『紅い悪魔』

彼女は吸血鬼だが小食なため人間から少量の血しか吸うことが出来ない。

吸血した際、その血をいくらかこぼしてドレスを紅く染めてしまうことから、彼女はそう呼ばれている。

「図書館の本には飽き足らず、ついには紅魔館の物まで盗もうとしたのね……しかもフランを共犯に仕立てて」

「ち、違うぞ！？ 私は本は盗んでないし、ってか盗みに来たわけでもなっつてうわッ！？」

言葉を言い切る瞬間、魔理沙の頬に紅い槍のようなものが一閃。館の壁をぶち抜き、そのまま真っすぐ奥へと伸びていって……

ドオオ……ンッ！

幻想郷から、小さな山が一つ消え去った。

「……レミリアさん、本気ですか？」

思わず魔理沙は敬語になった。

「ええ。本<sup>マジ</sup>気で殺すわ」

少女らしい、無邪気な笑顔。

そんな笑顔のままレミリアの全身から恐ろしいほどの殺気が吹きだした。

「だから話を聞けって！？ 私は探し物をしてここに来てだなあッ

！」

「パチエに代わってワタシが天誅を下してやるわ！ 覚悟なさい！」

「フランも弾幕ごっこするー！」

「だあー！？ 話を聞けつてのにい！？ おいフランも！ ってか二人してアタシを狙うなあ！？」

襲いかかるとんでもない威力の弾幕を避けながら叫ぶ魔理沙。

タンスはぶっ飛ぶわ、天井のシャンデリアが崩壊するわ、部屋はあつという間に崩れだして……

「あ、あつたー！」

そんな中でフランはなにかを見つけたらしく、声高らかにそれを真上に掲げた。

「フラン、あなたそこでなに……を？」

掲げられた何かを見つけたレミリアの動きが止まった。

魔理沙も同じ方向を向いてみると、フランが高らかにぬいぐるみを掲げていた。

「これは……」

「ベアさん！ テディベアだよー！」

ふわふわの茶色い毛並み。

愛くるしいつぶらな瞳。

ぺたりと座り込んだ姿をしたクマの人形だった。

「ほう、これがレミリアのぬいぐるみなのか？」

「ばッ……！ なんてもの掘りだしたのフラン！？」

「だって、魔理沙がぬいぐるみ探してるって言ってたからー」

「ほー、これは可愛いクマさんだな」

ほとんど汚れていないが、所々直したような跡がある。

よほど大事にしていたのだろうか？

「レミリアの大事な……ぬいぐるみか」

「ち、違うわよ！ そんなの抱いて寝たりしないわよ！」

「えー？ でもずっと前にお姉ちゃんと寝てたときいっつもあったよ？」

「……………」

紅の悪魔の顔が文字通り深紅に染まる。

そんな様子を見て、魔理沙は思わずレミリアがテディベアを抱きながら眠る姿を思い浮かべた。

「……似合ってるじゃないか」

「し、失礼な！？ ワタシはそんな子供じゃないわよ！」

「たしか名前はあ……………」

「うわわわあ！？」

そこから先はレミリアが口をふさいだため聞こえなかった。  
が、その様子を見てどうやら一緒に寝ていたのは事実らしい。

「ほう……レミリアお嬢様は名前までつけて可愛がっていらした……と？」

「う、うう……」

すると魔理沙はテイベアをひよいと持ち上げ、弾幕で空いた穴の方へと歩いていった。

「ちよつと！ どこ行くの！」

「こいつを探してたんだよ。ちよいと野暮用でな」

「だ、ダメ！ フラミイを返し……ハッ！？」

時すでに遅し。

思わず叫んでしまったテイベアの名前。

「レミリアとフランでフラミイ……か。子供らしく安直だなあ……」

「もう絶対に殺してやるー！？」

「へ？ またグングニ……ぎゃあああああ！？」

激昂したレミリアが放つ魔槍が再び閃き、完全に無防備になっていた魔理沙に直撃。

紅魔館に、本日二度目の叫び声が響いた。

### 第三十一話 紅姉妹（後書き）

……言えない。

ディシディアやってたら作業が遅れただなんて、俺には言えない……ッ！

### 第三十二話 紅い少女の予言（前書き）

帰りの遅い魔理沙を心配して、アリスとあてなは紅魔館へと訪れた。再びの来客にレミリアは眉間にしわを寄せるが、あてなを見て興味を抱く。

そしてそつと彼女に触れると、不思議な言葉を残して部屋を後にした。

### 第三十二話 紅い少女の予言

「帰りが一人だけ妙に遅いから何事かと思えば……」

「はっはっは。さすがに直撃は死ぬかと思っただぜ」

全身包帯まみれの魔理沙の姿を見て、アリスは大きなため息をついた。

一人だけ帰りの遅い魔理沙を心配してアリスとあてなが様子を見に来たら、穴の空いた屋敷と丸焦げの魔理沙を発見したのだ。

「紅魔館ってこれかあ。へえ……？」

忘却の苑以外の場所を訪れることがほとんどないあてなにとっては新鮮な場所だった。

来る時も外見が紅いことを見て納得したり、玄関で死体(?)を見つけて驚いてたり……

「また勝手に人が入ってくるなんて、門番はいったい何をしているのかしら？」

「門番？ え、そんな人いたかな……？」

首をかしげるあてな。

そんな彼女を、なにか珍獣を見るような目で見つめるレミリアとフラン。

「で、あなた誰？」

「知らない人ー？」

二人の視線に気づいたあてなは一度姿勢を正して、行儀よく会釈してみせた。

「えと、初めまして。ぬいぐるみの修理をしてる糸柳あてなって言います」

「ぬいぐるみの修理？」

「そんなもの、頼んだ覚えはないのだけれど」

「なによ魔理沙、事情を話してないの？」

「あ？ ああ、すっかり忘れてたぜ」

笑って誤魔化そうとしたが、背中に冷たい気配を感じたのでそれは止めた。

「え、えつとな。実はな……」

魔理沙はかいつまんで二人に事情を話した。

「そう。だいたいの事情はわかったわ」

「ぬいぐるみってコレ？」

フランが差し出したティベア。

しかしあてなは首を横に振った。

「……ううん、違うかな。それには別の思い出がいっぱい詰まっているから」

「別の思い出？」

「すごく大事にされてるもん。ほら、ここ直した跡があるし、それにこの子名前まで付けられてホントに幸せそうで……」

言い終わる前に、レミリアが強引にぬいぐるみをひったくる。

「な、な、な！？　なんで名前までわかって……！？」

「そっか。この人に大事にされてたんだね。ふーん……寝る前にキスまでされて」

「わー！？　わー！？　わー！？」

全身真っ赤にして叫ぶレミリア。

それは恥ずかしさを隠そうとする子供そのものの反応だった。

「そうか、お嬢様はそんなに寂しい夜を……」

「卑猥ねえ……」

アリスと魔理沙がまるで悪役みたいな陰険な顔をしてレミリアを見つめた。

「ち、違うわよ！　ってか卑猥ってなに！？　ぬいぐるみと一緒に

寝ちゃいけないの！？」

「いいんじゃない？　年相応の行動でしょ」

「ぐぐぐ……う、ううう……」

だんだんと小さくなるレミリア。

もうほとんど半泣き状態。

しゃがみ込んで両手で顔を覆って、あとは泣きだせば完全に敗北である。

「そ、そこまで恥ずかしいことかな……？　ボクは毎日一緒に寝てるのに」

「ほら見なさい！　全然恥ずかしくなんかないわよ！？」

途端に立ちあがって胸を張るレミリア。

こっそり頬に涙の跡があるのは内緒である。

「おい、それってつまり一緒に寝たのを認めるってこ」

「だああああらっしやあああああ！？」

誠に唐突だが、今この瞬間、魔理沙は空を輝く星になった。

「……コホン。ワタシとしたことが、少々取り乱してしまったわね」

「今日のお姉ちゃん面白い！」

お気に入りの人が吹き飛んだというのにフランはパチパチと拍手しながら笑っていた。

「しかしここでもないとすると、あのネズミは役に立たなかったということね」

「そんな端的に言わなくてもいいんじゃない？」

星になった魔理沙を完全に無視して二人は話を進める。

苦笑いを浮かべるあてなに、ふとレミリアが近づいてきた。

「ふうん……」

「な、なんですかレミリアさん？」

「レミリアでいいわ。それより……」

まるで品定めでもしているかのようにあてなの全身を観察するレミリア。

あてなは服に汚れてもあるのかと、ローブのあちこちを見まわした。

「や、やっぱり汚い……ですか？」

「そうね、汚いのも事実だけど」

「うう……」

しよげるあてなを無視してレミリアは続けた。



「あなた、ちょっと変わった運命の持ち主のようね？　紅魔館へ来た記念、というわけでもないけど……」

「……？」

するとレミリアはあてなのおでこにちゃんと指を当てた。

「ふふん。あなたのお家へ行ってごらんなさい？　そこで待っている人……いえ、思い出があるわよ？」

「え、それってどういう……」

レミリアはそれ以上言わず微笑んだ。

そして何事もなかったかのように振り返ると、

「今日は見逃してあげるから、さつさと帰ってちょうだい」

それだけ言って自室を後にした。

「あ、お姉ちゃん待ってー！」

その後をフランが追って、部屋にはアリスとあてなだけが残された。

「さ、さっきのどういう意味なんだろう……」

「わからないわね。とりあえず」

「あ、そうだ魔理沙を助けに行かないと！」

部屋にぽっかり空いた大穴を抜けて、二人は紅魔館を出ていった。

「ねえお姉ちゃん？　さっきのぬいぐるみの人になにしたの？」

フランがアイスクリームを頬にくつつけながら訊いてきた。

「うん？　そうね、強いて言うなら……あの子の運命を悪戯したの」

「ふうん？　う……ん？」

わかったようなわかっていないような、フランは複雑な表情を浮かべたままアイスクリームを頬張った。

「咲夜ほどではないにしろ、あの子もずいぶん変わった運命の持ち主ねえ……？」

そしてレミリアはアイスクリームの最後の一口を口に放り込んだ。

### 第三十二話 紅い少女の予言（後書き）

魔理沙の扱いがだんだんとパターン化されてますね。

ファンには申し訳ないんですが、俺としては立ち位置や言動を簡単に考えられるので大助かりです。

そして気がつくとお気に入り登録件数がまたまた増えてます。

登録してくださった方々、読んでくれる方々ともに、ありがとうございます。

なにかご意見等あれば、自由にコメントしていたださいね。

### 第三十三話 悪戯された運命（前書き）

紅魔館から帰ってきた三人。

しかしあてなの思い出とは結びつかず、ナズ リンは再び力を使いあてなを調べてみた。

すると、先ほどは見えなかった別のビジョンを見つけた。

### 第三十三話 悪戯された運命

その後、ぼろぼろでよれよれの使い古された雑巾みたいに汚くなつた魔理沙を回収してから、二人は小屋へと向かつていた。

「おい、ぼろぼろのよれよれで使い古された雑巾ってなんだよ!？」

「はあ？ なにをそんなに怒ってるのよ。いいからさっさと帰るわよ」

「げ、解せぬぜ……」

陽の落ちた妖怪の山は闇に包まれていた。

視界は最悪で、ほんの少し先も見えないほどに暗くなっていた。

「早く帰ってこれからのことを考えないとね、あてな。……あてな？」

アリスが声をかけても返事がない。

ただ目の前の闇の中をぼんやりと見つめていた。

「レミリアの言葉が気になるの？」

「え？ ……ああ、うん。不思議な人だなあって思ってた」

「姉妹そろって変なヤツだからなあ。ま、あんまし気にしなくていいんじゃないか？」

「う、うん……」

しかし、レミリアはなぜあんな言葉を残したのだろうか。

『あなたのお家へ行つてごらんさい？　そこで待っている人……いえ、思い出があるわよ?』

待っている思い出がある。

それはどういう意味なのだろうか。

思い出を探すにあたって、もちろん小屋の周りのゴミ山もあてなは探しただろうに。

「とにかく、小屋へ戻りましょう。この後の計画も考えないと」

「そ、そうだね。うん！」

空元気だけでもと、あてなは少し大きな声で返事した。

「お帰りなさい、あてな」

「うん。ただいま」

小屋には雛とナズ リンがテーブルに腰掛けていた。

「ずいぶんと汚いじゃないか魔理沙。なにかあったのかい？」

「紅魔館でどんばちやられたというか、なんというか……」

「それよりナズ リン。話が違うじゃないの。紅魔館に行ってもなにも見つからなかったわよ」

「だから、今回は自信がないといっただろう。ただ、彼女の記憶の中にそれらしき断片があつてだな……」

「そもそもどうしてあてなさんの記憶の断片に紅魔館が存在したのでしょうか？ あてなさんは一度も訪れたことがないのですよ？」

「み、みんなして私を見るんじゃない。もう一度試してみるから少し待て……ふむ」

再びあてなの額に手を触れると、前と同様に淡い光がもれた。

「ん……今度はこつちを使ってみようか」

ナズ リンは自分の胸元に吊る下がった小さなペンダントを取り出し宙にぶら下げてみた。

「それは？」

「ペンデュラム。ロッドと同じようなものさ」

そして催眠術でもかけるみたいにな左右へ静かに揺らす。

見つめていると、だんだん体も左右に揺れてきて……

「うう、なんだか眠くなって……きた……」

「魔理沙が反応してどうするのさ。というか催眠術ではないのだが」  
「上海」

アリスが指をパチンと鳴らすと、どこからともなく人形が現れた。  
なぜか手にはやたらデカいハリセンを握りしめて。

スパーンツ！！

「いつてえええええ！？」

小屋に小気味のいい音が響いた。

「うん……？ おかしいな……」

すると、ナズ リンが怪訝そうな顔をした。

「なにがおかしいのよ」

「さつき見えなかったビジョンが見える。しかもこの場所は……」

「どこ！？ どこなの！？」

興奮気味のあてなはナズ リンに掴みかかるように訊いた。

「お、落ち着きたまえ。今見えた場所なんだが……ここなんだ」

「……え？」

あてなも含め、一同が全員同じように間の抜けた声をあげた。

「この小屋の裏手にあるゴミ捨て場の奥が見えた。……そこで白いクマのぬいぐるみがぐったりしてるのが見えたんだ。突然鮮明に見えたもんだから、私も驚いているよ」

「白い、クマ……？」

「しかしおかしいな……最初に君を見た時はこんなビジョンは浮かんでこなかった……！ ちょっと、あてな！？」

言葉を聞き終える前に、あてなは疾風のごとき速さで駆けだし、外へと飛び出していった。

### 第三十三話 悪戯された運命（後書き）

そろそろクライマックスですね。

今の内に次の書き始めないとなあ……

あ、今のところオリジナルは全然ダメです。

微塵も浮かんできやしない……；

第三十四話　ただ、ひたすらに（前書き）

無我夢中でゴミ山を掘り返すあてな。

その腕が傷付くこともかまわずひたすらゴミ山に手を伸ばす。

そんな傷だらけの腕を優しくとったアリスは、全員で協力してあてなの思い出を探し始めるのだった……



### 第三十四話　ただ、ひたすらに

「どこ！？　どこ！？　どこなの！？」

静かな月明かりが注ぐ忘却の苑。

小屋を飛び出したあてなは、裏手に広がるゴミ山をひたすら掘り返していた。

ただ一心不乱に、目に付いたゴミ山を片っ端から掘り返す。

「お、おい！　落ちつけあてな！？　そんな乱暴に手をつ突っ込んでたら怪我しちま……ッ！」

魔理沙が声をかけた時にはすでに、あてなの両腕は黒く染まっていた。

腕の傷はひどく、傍から見ても危険な状態だとわかるほどに出血している。

しかしそれに構わず、あてなはただひたすらゴミ山を吹き飛ばしていた。

「おい、やめろって！？」

「あてなさん！」

「あてな！」

声は、届かない。

月明かりに照らされた血だらけの両腕が痛々しい。

「無理やりにでも抑えるしかないか……！？」

「とにかく行きましよう！」

ゴミの塊を飛び越え、なおも暴れ続けるあてなに魔理沙の手が伸びて、

「落ち着けよあてな！？　腕そんなにしてまですることないだろ！」

「うるさい！」

強引に魔理沙の腕を振りほどくと、あてなは手を止めて魔理沙の方へと視線を向けた。

「おまえ、泣いてるの……か？」

月に照らされるあてなの横顔。

一筋の涙が頬を流れていた。

「……ボクの、ボクが棄ててしまった思い出から……ボクが見つけなきゃいけない。ボクが怪我しようと、死んだとしても絶対に見つけなきゃいけないんだ。だから、こんな腕なんか無くなっても……」

「本気で言ってるのかしら？」

アリスの声だ。

魔理沙の後ろから静かに現れると、アリスはゆっくりとあてなに歩み寄る。

「腕なんか無くなっても、だなんて本気で言ってるのかしら？ あなたの腕が無くなったら、だれがその思い出を直すのかしら？」

「そ、それは……」

口ごもるあてなの腕にアリスは優しく手を添えると微笑んだ。

「私たちも手伝うから、そんな無理はしないでちょうだい。まだまだああなたが直すべき思い出もあるでしょう？」

「あ、アリス……」

「おし！ んじゃ探しますか！」

「じゃ、私はあちらの方を」

「私は向こうを探そう。なに、すぐに見つけてみせるさ」

「みんなまで……」

そんな彼女たちの姿を見てあてなは涙ぐんだ。

「さて、私も探さないと。じゃあ、向こうでも調べてみようかしら」

そう言つて、アリスは奥の方へと飛んでゴミを調べだした。

みんなが自分の思い出を、自分のために探してくれている。

それがとても恥ずかしくて、でも、嬉しくて……

「……………ん、うし！ ボクも頑張らなきゃ！」

あてなは顔をビシバシ叩いて気合いを入れ直すと、彼女ら同様にゴミ山を調べようとして、

あ、テな？

「ッ！？」

声がした。

名前を呼ばれた。

初めて聞いた声なのに。

もちろん聞き覚えはないのに。

それなのに、懐かしい声。

「今の、声は……」

声のした方を向く。

そこには周囲と変わらないゴミ山が存在するだけ。

ただ、それだけ。

「今の声、どこ……痛ッ！？」

血まみれの腕を伸ばそうとして、激痛が走る。

さっきまで忘れていた傷の痛みが、今になって急に痛み出した。

「ボクこんな無理してたんだ……あはは。そりゃ怒られるか」

自嘲気味に笑うと、あてなはローブの裾を破って腕に巻き付けた。

無いよりはマシだろう。

そして少しずつゴミを退かし始めた。

「ッ！　つてて……」

手の平にガラスの破片が刺さって赤い雫がこぼれる。

あてなはもう一度ローブを破って、今度は手の平に巻きつける。

ローブはもうほとんどミニスカート状態。

けれど、これでもう少しだけ頑張れる。

あてなは痛む手を伸ばして作業を再開する。

ゴミに手を伸ばそうとすると、後ろから手が差し伸べられた。

「あてなさん、ここなのね？」

「ったく、見つけたんなら教えるよな？　みんなでやった方が早いぜ？」

「ひ、雛ねえちゃんに魔理沙……」

二人の腕と協力して大きなテーブルを退かす。

しかし今度は大きなスクラップ。

「私のペンデュラムもそこを指しているみたいだ。協力するよ」

「ナズ リンさんも……」

三人の協力でなんとか退けると、

「今度は……な、なんだこれ？」

目の前に現れたのは、大きな金属の入れ物に車輪のついた不可思議なゴミ。

「車、ってやつだね。とても使い物になりそうにないけど」

「よし！ 今度も四人でやるぞ！ うつりやああああ！？」

全員が渾身の力を込めるが、スクラップと化した車はびくとも動かない。

ほんの少し持ち上がるだけで、それ以上は動かない。

何度も試すが、同じことのくり返して一向に進まない。

「め、めんどくせえ！？ いっそマスパで吹き飛ばして……！」

「バカだな君は。そんなことしたら彼女の思い出まで吹き飛ばしてしまうだろう？」

「ち、でもよお……」

忌々しげに魔理沙はゴミを殴りつける。

ドン、とくぐもった音が虚しく響く。

「あなたたち、退きなさい」

すると、アリスの声が凜と響いた。

「あ？ おまえいつたい何をする気だよ？」

「壊さずに、退かせばいいのでしょうか？ 簡単よ」

月を背にアリスはスッ、と右手を掲げた。

その手に小さな符を握りしめて。

「騎士『ドールオブラウンドテーブル』」

符が小さく光を放つと、十二の人形がどこからともなく現れ、アリスの目の前をふわふわと漂う。

アリスが腕を振り下ろしてスクラップを示すと、人形は弾丸のよう

な速さで突っ込んでいく。

四人がかりで動かなかった車が、少しずつ浮き上がる。

「す、すごい……アリスの人形ってこんなに強いのか……？」

「見てないで手伝いなさい。人形だけじゃ限界があるわ」

慌ててあてなたちも車を持ち上げようと手を伸ばす。

スベルカード  
術符の力と四人の少女の力。

それでも、スクラップはほんの少しずつしか持ち上がらない。

「ゴミのくせに、ずいぶん重いじゃないのか……このッ！？」

多大な精神と集中力を消費する術符。

なかなか持ち上がらないスクラップにいらつきながらも、アリスは力をコントロールする。

……少し、力が足りないか。

その時、魔理沙が声をあげた。

「おいアリス！ もう少し力入れろ！ 人形の力が弱くなってるぞ！？」

「言われなくても……ッ！」

慣れないことをしているせいか、いつもより精神の消費が激しい。

人形の力が徐々に弱まり、持ち上がっていたスクラップが少し落ちかける。

「ッ……！？」

アリスの脇から、なにかが飛び出しスクラップの方へと向かっていった。

「上海！？」

「ワタシモ、テツダウ」

人形はスクラップの真下に入り込むと、その小さな両腕で目一杯持ち上げようとした。

「おら！ 全員踏ん張れって！ ネズミも底力見せてみるよ！」

「わかってる……ッ！」

「おまえも、天を貫くような勢いで気張れって！」

「ドリルじゃないんだから、こんなときに回るわけないでしょ！」

もうッ！」

「魔理沙……！」

ギシギシと歪ひずな音を立てながら、スクラップが少しずつ持ち上がったいく。

もう少しで、もう少しで退かせる。

「うあああああああ！！！」

渾身の気合いを込めて、全員が押し上げる。

スクラップは数秒だけ空を飛んでから、奥のゴミ山へと突っ込んだ。ドスン、と重い音とともに巻きあがる砂煙。

「や、やった……！ やったよみんな！」

あてなが飛びあがって喜ぶ。

魔理沙も、雖も、ナズ リンも、アリスも、肩で息をしながらあてなに微笑みかえした。

「おう！ ざつとこんなもんだぜ」

「少し疲れてしまいましたけど……」

「どうだい？ ネズミを見直したか？」

「ネズミ関係無いじゃないの」

クスクスと笑うあてなにつられて、全員で笑いあった。

「そうだ、ボクの思い出……」

ぽっかり空いた空間にあてなが飛びこむ。

全員は静かにそれを見つめて、突然あてなの声が響いた。

「ああッ……！？」

声に驚いた魔理沙たちは急いであてなの方へと駆け寄った。

しゃがみ込むあてなは、なぜか震えていた。

「あてな！ どうしたの！？」

「あ、アリス……」

ゆっくりと振り返るあてな。

「……なッ！？」

アリスは思わず目を見開いた。

その腕の中には、朽ち果てた白いクマのぬいぐるみと、金髪の小さ

な人形が眠っていた。

### 第三十四話　ただ、ひたすらに（後書き）

なんていうか……若干反省してます。

で、今日はこれだけ；

というか今から突然のバイトです；

そして思うのですが、お気に入り登録を解除した人ってのは、読破した人なのか？

それとも、お話が気に入らなくなっちゃった人なのかな……？



### 第三十五話 目覚めぬ君（前書き）

見つけ出したぬいぐるみを早速修理するあてな。

作業はあつという間に終わるが、なぜかぬいぐるみの声が聞こえなかった。

うつむくあてな。

今は一人にしてあげようと、アリスは気を利かせて外に出て待つことにした……

### 第三十五話 目覚めぬ君

作業机に横たわる、白いクマのぬいぐるみとアリスのお氣に入りの人形。

あてなは二つを交互に見ながら小さくうなっていた。

ぬいぐるみは右腕が千切れかけていて、体は汚れてほとんど真っ黒。人形は左腕がおかしな方向に曲がっていて静かに眠っている。

「……あなたのぬいぐるみ、なにも言わないのね？」

「さつきはたしかにボクを呼んだはずなんだけど、急に黙っちゃって……」

何度かぬいぐるみの頭に触れたり、お腹を撫でたりしたが、あてなの意識に語りかけることはなかった。

一通り確認を終えると、今度はアリスの人形に手を触れる。

「アリスの人形は……腕が折れちゃってる。でも、これぐらいならすぐ直せるから安心して」

「ありがとう。でも、まずはあなたのぬいぐるみの修理が先でしょう？」

「うん……」

念願のぬいぐるみを手に入れたというのに、あてなは浮かない顔をしていた。

「どうしたんだ？ 前みたいにパパッと直せないのか？」

「それがその、直せるには直せると思うんだけど……」

「……どうかしたんですか？」

あてなはぬいぐるみをもう一度撫でる。

ボサボサの毛の感触が手の平に伝わってくる。

「声が聞こえないのが気になるんだ。いつもならすぐにお話してくれるのに、今回に限って全く聞こえないんだ」

「声が聞こえないといけないもんなのか？」

「そっというわけじゃないんだけど……」

机の引き出しからいつも使い慣れた道具を取り出す。腕や手は傷だらけだったが、今は包帯を巻いてある。少し動きづらいが作業に支障はないだろう。

「それじゃ、まず……」

針に意識を集中させて力を込める。

そして、千切れかけの腕を糸とゆっくり繋げていく。

いつもより丁寧に。

いつもより細かく。

時間をかけてゆっくりと仕上げていく。

「相変わらず器用だよなあ……」

「魔理沙も少しは見習ったらどう？ 雑巾ぐらい縫えなきゃ恥ずかしいわよ？」

「失礼な。この針で縫うだけだろ？ すぐに出来るっつの」

「……えと、魔理沙が持つてるのまち針なんだけど」

そして余った糸を切り取って、千切れた腕が直った。

試しに上下に動かしてみても問題なく動いた。

「……どう？ ボクの声、聞こえる？」

あてながぬいぐるみに語りかけたが、ぬいぐるみはなにも答えなかった。

「……おかしい。どうして答えてくれないんだろう？ まさか、手遅れとか言わないよね……？」

「そういうのは最後まで直してから考えなさい。まだ、完全に直ってないでしょう？」

「う、うん……」

気を取り直して再び作業を再開する。

今度はぬいぐるみの体を直す作業。

前回同様、あてなはローブから術符を取り出して意識を集中させた。  
スベルカード

「裁符『リバース・クロース』」

術符が淡い光を放つと、光はそのままぬいぐるみの体へと降り注いでいく。

そして光が全身を包みこむと、ぬいぐるみの体はまるで新品同様に綺麗でふかふかになった。

「それで、終わりか？」

「そのはず……なんだけど」

あてなは横たわるぬいぐるみを机に座らせて正面から見つめる。

そのまま数分が過ぎたが、まるで動く気配すら見せない。

「おかしい。おかしいよ。全然声が聞こえない！ お話してくれない！ やっぱり見つけるのが遅すぎて……！？」

「落ち着けてあてな！？」

取り乱すあてなを魔理沙が慌てて抑えようとする。

魔理沙の腕の中で、あてなは糸の切れた人形のようにつつむいてしまった。

「他に手はないのか？ ほら、魔法の糸で縫うと直るとか、他のスぺカでなんとかなるとか……」

「……………」

あてなは黙ったまま魔理沙の腕を振りほどくと、机の方へと戻っていった。

「……あ、アリスの人形直すね。すぐ終わるから、ちょっと待って」

「え？ ええ……それはかまわないのだけれど」

そして黙々と作業に取り掛かるあてな。

しかし、人形を見つめるその瞳は虚ろで、

「あてな、私の上海は後でもいいからあなたのぬいぐるみを」

「待ってて、すぐ直すから……」

声は届いていなかった。

震える手で人形を握りしめて、その金の髪を撫でるあてな。

うつすらと、涙を浮かばせながら。

「……外で待ってるわ」

「ちょ、アリス！？」

アリスはそれだけ言うと、さっさと小屋を出て行ってしまった。

「私も外で待とうか」

「少し、夜風に当たってきますね」

「……わかった。アタシも付き合う」

そして、小屋にはあてな一人が残された。

「あてな、大丈夫かな……」

虫の音も聞こえない静寂。

青白い光を放つ満月を見上げながら魔理沙がつぶやいた。

「……本当に手遅れだったのでしょうか？」

「それはないはずよ。手遅れだったら、ぬいぐるみは消えてしまうはずだもの」

目の前でぬいぐるみが消えるのを見たアリスが言った。

忘れられたぬいぐるみは存在理由を失い、幻想郷から消えてしまう。でも、それなら何故あてなのぬいぐるみはなにも反応しないのだろうか。

あてなが、自分の思い出を忘れるはずなどないのに。

「せっかく見つけたのに、まさか目の前でお別れなんて言いませんよね……？」

「……そうならないことを、祈るだけよ」

そしてアリスは夜空を見上げた。

願いを叶えてくれる流れ星が落ちてくれればいいのに、と微かに願いながら。

### 第三十五話 目覚めぬ君（後書き）

昨日は更新できなくてすいませんでした；

コメントしてくださったじらいさん、ありがとうございます。

このお話も、そろそろ………終わりですね。

第三十六話    T e a r s    o f    M e m o r i e s (前書き)

一人残されたあてなは思い出していた。

幼き頃の大切な思い出を。

そして、追憶するあてなの前に、奇跡は訪れた。

### 第三十六話    T e a r s    o f    M e m o r i e s

「ボクつてば、情けないな……」

誰もいなくなつた小屋の中であてなはつぶやいた。

目の前で横たわる白いクマのぬいぐるみ。

聞こえた声は幻だったのだろうか、と思うほど黙つたままだ。

ぬいぐるみを撫でながら、あてなは思い出していた。

「……そういえば、キミと最初に会つたのはボクがまだ学校にも行つてない時だっけ。誕生日プレゼントだつて、お父さんに買ってもらえたんだよね。それでボクは嬉し過ぎて幼稚園に持つて行つて、同級生に取られそうになつてボクが大泣きしたんだ」

同級生をボコボコにしたのを思い出して、くすくすと笑いが漏れた。今彼はなにをしているのだろうか？

「他は……そうだ。キャンプに行つた時も一緒だったね。本物のクマが出たらボクを食べないように説得してつて頼んだの覚えてる。今考えるとずいぶんキミに無茶苦茶なお願いしてたなあ……ふふっ」  
寝袋で二人で寝たことも覚えている。

両手で抱きしめながら、満天の星空を眺めたことも思い出した。

「幼稚園を卒園して、学校に初めて行くつて時も持つて行こうとして……あの時はお母さんに怒られたんだ。だから学校で寂しくて泣いちゃつて……歸つてきて最初にただいまつて言つたの、お母さんよりキミの方が多かったね」

そのせいで入学式を遅刻しそうになつたのも思い出した。

式の内容など、ほとんど覚えてはいないが。

「それから……それから、そうだ」

あの日の出来事を思い出して、それまでの笑顔が一瞬で消え去つた。  
「……それから、キミを棄てたんだよね。……あの日のゴミ捨て場で。理不尽な理由でボクが棄てたんだ」

雨の中、ゴミ捨て場で横たわるぬいぐるみの光景が脳裏に浮かぶ。



「『もう子供じゃないんだから、ぬいぐるみなんか捨てなさい』……そうお父さんに言われて、ボクはものすごく怒った。キミと出会ってからずっと一緒だったのに。絶対離れることなんかないと思ってたのに。何度も何度もお父さんに言っただけ……結局、棄てたんだ。もっともつと強く言えば良かった。絶対嫌だって言えばよかった。どうして出来なかったんだろう……いや、しなかったんだろう。あの日急いでキミの元へと走っていけば、間にあったかもしれないのに……」

もう戻らない時間。

あてながあのゴミ捨て場に戻ったのはそれから一週間も後だった。その時にはもう……影も形も無かった。

「だからボクはこの幻想郷にキミを探しにきた。最初、あの胡散臭そうなお姉さんに誘われた時は全く意味がわからなかったけど、あのお姉さん今なにしてるんだろ？」

会えたら感謝しなくてはいけない。

おかげで不思議な友人もたくさん出来たし、なにより、探していた思い出が見つかったのだから。

「……全部キミのおかげだよ。ありがとう」

ぬいぐるみを両手で抱えて頭を優しく撫でる。

ふわふわと柔らかな感触が温かい。

思わずこぼれた涙がぬいぐるみに落ちる。

すると、突然ローブのポケットから強い光があふれた。

「へ？ この術符は……」  
スベルカード

取りだしたのは、あてなが使っていた術符とは違う、今まで見たことも無い術符だった。

「……これを使えば、キミが完全に直る」

確信は無かったが、なぜかそう思えた。

机の上にぬいぐるみを座らせると、瞳を閉じて深呼吸。

そして……唱えた。

「ボクの、ありつたけの願い。追憶、シグニチャー・キルト」

術符から激しい閃光がほとばしると、次々とぬいぐるみの体へと吸い込まれていく。

すると、ぬいぐるみは真白に輝き宙に浮かんだ。

「わ……！ いったいどうなって！？」

徐々に光は弱くなり、宙に浮かんだぬいぐるみは机の上にポンっと少しバウンドしてから着地した。

「……ど、どうなったの？」

やや間を開けてから、ぬいぐるみはひとりでに動き出し、

アリガトウ。

「ッ！？」

あてなの方を向いて、言った。

あてなの直した人形やぬいぐるみたちとは違う、優しい声音でぬいぐるみが語りかけてきた。

「……ホントに、ホントにキミの声！？」

ぬいぐるみはくすくすと笑うみたいに、そのふわふわな腕を口元に持っていた。

アテナガナオシテクレタンジャナイカ。

キミガオドロイトドウスルノ？

「よかった……ッ！」

涙が頬を伝う。

感極まったあてなはぬいぐるみに飛びついた。

アリガトウ、アテナ。

スゴクウレシカタヨ。

コンナニオオククナツテモ、ボクノコトオボエテクレタンダネ。

「当たり前……前だよお！　ボクの、ボクの一番大事な……思い出なんだからあ！」

号泣するあてなの頬を撫でるふわふわな手が、そつと涙を拭った。

「あてな……大丈夫？　さっきすごい光が……あら」

小屋から漏れた激しい閃光が気になって、アリスたちはそつと玄関を開いた。

「あん？　どうかしたのかアリ」

「しッ。静かにして」

そう言つて、アリスは口元に指を立てながら奥を示した。

「……なるほど」

「幸せそうな顔ですね。ふふ」

部屋の奥には、幸せそうに微笑む少女の姿。

あてなは椅子にもたれかかって静かに寝息を立てていた。

もう離さないと、しっかりと両手で大切な思い出を抱えながら……

第三十六話    T e a r s    o f    M e m o r i e s (後書き)

次回、最終回。

……の予定です。

## 終章 最後のキセキ（前書き）

夜明けとともに目を覚ましたあてなは、開口一番でお礼を述べた。  
様々な出来事、新しい友人。取り戻せた思い出。

幸せいっぱいのおてなは、最後の最後に小さな奇跡をアリスに見せた……

## 終章 最後のキセキ

「みんな、いろいろ協力してくれてありがとう」

夜が明け、目覚めたあてなは早速アリスたちに頭を下げた。

「私は手助けをしたにすぎないさ。見つけたのも直したのも、全てキミの力だ」

「てか、そんなにかしこまらなくてもいいーぜ？」

ニツと笑う魔理沙。

クールに決めたナズリン。

「いえいえ。人の厄を払うのが私のお役目ですから」

ニコニコ微笑む雛。

こんなときでもくるくる回っていたが。

「私はなにもしてないわ。ただ、ちよつと手伝っただけよ」

恥ずかしいのか、そっぽを向いてアリスは言った。

そして振り返って、

「……これから、どうするの？」

「ボクのやることは変わらないよ。棄てられた思い出を探して直す。修理人の使命だからね。それに今度からは……」

あてながちらと方の方へ視線を向けると、白いクマのぬいぐるみが顔を出した。

「うお！？ 動いたぞ！？」

アテナノオトモダチノミナサン。

コノタビハドウモ、ボクノタメニゴメンドウヲオカケシマシテ……

「い、いえこちらこそ……」

礼儀正しいぬいぐるみの言葉に、アリスたち全員が軽くかしこまって会釈して返した。

ぬいぐるみに頭を下げるその光景は、傍から見るとすごく珍妙に見

える。

「この子いるから寂しくもないし！　また明日からがんばる！」

朝日に負けないぐらい、眩しい笑顔。

それを見て全員も笑顔になった。

「それじゃ……私はそろそろ失礼するよ。主人の探しものを探さなくてはね」

「私も行きますね。あてなさん、また今度遊びに来ますね」

「うん！　ありがと、ナズ　リンさん。雛ねえちゃん」

そう言つて、雛とナズ　リンは手を振りながら森の中へと消えてしまった。

「アリス、アタシたちもそろそろ帰るか」

「そうね」

「魔理沙も、アリスもありがとう。また今度、遊びに行つてもいいかな？　もちろんこの子と一緒に！」

「おう、いいぜ。今度はアタシん家でも来るか？」

「ホント？　楽しみだなあ……」

「……魔理沙、ちよつと先に行つててくれないかしら？」

「ん？　わかつたぜ」

魔理沙は別れの挨拶を済ませると、箒であつという間に飛んでいった。

「いろいろ手伝つてくれてありがとうね、アリス」

「別に気にしないでいいのよ。私のちよつとした好奇心だったんだから」

「好奇心……？」

首を傾げるあてな。

アリスは数歩前を歩いてから振り返り、あてなと向かいあつた。

「人形やぬいぐるみの表情を読み取ることの出来る人間なんて初めて見たもの。人形使いとして、当然興味をそそられるじゃない」

「ああ、なるほど。まあ……ボクにとっては全然普通のことなんだ

けど」

「少し……うらやましいわ」

「え？」

アリスは今まで誰にも見せたことのないような寂しそうな顔をした。  
「私は作った人形の気持ちなんてわからないもの。作られて嬉しい  
だとか、楽しいだとか、笑いかけてくれるような人形は作れないわ」  
そう言いながら、アリスは上海を取り出して抱えた。

怪我は直っているが、その小さな瞳は閉ざされたままだった。

「私も、なれるのなら人形の気持ちの分かる人形使いになりたいわ。  
そうすればもつと良い人形が作れるかもしれない」

「アリスならなれるよ。すぐにでもね」

「……根拠は、あるのかしら？」

するとあてなは、口元に軽く笑みを浮かべながらアリスを指差した。

「……？」

「だって、ほら」

腕の中の人形がアリスを見上げていた。

「アリス。オハヨウ」

「あら上海、起きてたのって……え？」

人形の表情を見てアリスは思わず息を飲んだ。

腕の中、人形は優しく微笑み主人をその小さな瞳で見つめていた。

アリスが初めて見た人形の笑顔。

「ほらね。言ったとおりでしょ？ アリスの人形は笑うんだ」

得意げに笑ってみせるあてな。

もしかして、彼女がなにか施したくれたのだろうか……？

「……ありがとう。あてな。これから、頑張つて、ね」

自然と右腕が伸びた。

そして、あてなも同じように手を伸ばして握手を交わした。

「うん！ また会おうね、アリス」

「ええ。もちろん、喜んで」

そしてアリスは振り返り、帰路へと着いた。



その後ろ姿が見えなくなるまで、あてなは懸命に手を振り続けた。  
肩に乗せた思い出とともに、大切な友人をいつまでも見送り続けた

……

） F i n ）

終章 最後のキセキ（後書き）

Tears of Memories 最終話

そして、お次はあとがきです。

## くあとがき Tears of Memories

このたびは『Tears of Memories』を読んでいただき、ありがとうございます。

前回『東方紅葉記』よりもほんの少しボリュームを増したつもりですが、いかがでしたでしょうか？

閲覧者は依然と変わらずでしたが、今回は前作の倍以上の人にお気に入り登録してもらったみたいでとても嬉しかったです。

二次創作はこれで二作目。

小説の練習と始めたものですが、最近はこちらを書く方が楽しかったり（オイw

今回の出来は……40点ぐらいかな？

未だに怪しい日本語とか、下手くそな地の文が目立ちます……；

こんなじゃ小説家になれない！

と、のんびり焦ってますw

さて、今作の元ネタなんかを披露しましょうか。

・オリジナル主人公、糸柳あてな。

ある時、暇つぶしに東方のオリジナルキャラを考えてみようとする程度の能力を備えたキャラを適当に考えていました。

その時、最初に浮かんだのが『お裁縫をこなす程度の能力』でした。とてもハタチの男が思い浮かぶ能力とは思えませぬw

その時、なら名字はどんなのにしようか？ 名前はどのような？  
といういろいろ調べていました。

まず最初に名字。

これはものすごくあっさり決めましたw

漢字辞典で『糸』の意味を調べていると、単語紹介の部分に『糸柳<sup>しりゅう</sup>』というものがありました。

シダレヤナギの別名なんですが、この字をそのまま名字として使ったんですw

とっても単純ですね。

次に名前。

東方Projectのキャラの名前は神話の神様に関する名前が多々見受けれるので、こちらでも神様でなにか探してみようと思いました。

由来はもちろん、ギリシャ神話の女神『アテナ』からです。

この女神は知恵を司る女神ですが、同時に工芸、手芸等の技巧に関する女神でもあるんです。

それならお裁縫だって司っているはずだ！ と勝手に決め付けこの名前を付けました。

なぜ平仮名なのかというと、カタカナにしてしまうと某格ゲーのサイコソルジャーと被るから……w

そんな感じで、キャラそのものはあつという間に出来ました。

・東方キャラのチョイスについて

今作に登場したキャラは、魔理沙、アリス、雛、慧音、香霖、ナズリン、椛、レミリア、フラン……です。

名前が出てないだけで、一部のキャラも出たりしてますが割愛。

魔理沙とアリスはセットです。

ただ、アリスはあてなと似た境遇でしたので、一番関わりのある人物として書いていました。

雛はあてなの保護者的な立ち位置で。

慧音はもう少し深く組み込もうかと思っていたのですが、話が勝手に進んでしまったため却下。

香霖、ナズ リンはいろいと都合の良いキャラでした。

椛は、単純に前作から引き継いで出したかったですw

レミリア、フランのスカーレット姉妹。

今回はレミリアの『運命を操る能力』を都合よく解釈し、半ば無理

やり使いました。

おかげで、あてなが思い出と巡り合えたので良しとしますが……

あ、今作のテーマは『思い出』です。

ずっと前に失くした思い出を、ふいに思い出すことってないですか？  
小さなころにもらったおもちゃだとか、手紙だとか、自信が成長してから振り返ってみると、ひどくちっぽけなモノだったり、実はもう、失くしてしまっていたり……

そんなことをふいに思いついて、そのまま思いついたまま自由に書いてました。

俺の二次創作があんまし目立たないのは、そういった比較的マジメなテーマだからかもしれません；

・一部のネタ紹介

今作における魔理沙&アリスの掛け合い。

とあるライトノベルのキャラの掛け合いとほとんど同じです。

主人公が怠けようとしたり、変なコトをしたりすると白刃が煌めいて……

第九話 えんがちよ。

千と千尋の神隠しでも、釜じいがやってましたね。

第十一話 黄色い体でほっぺの赤い……

どこぞの世界の電気ネズミです。

第十三話 あてなの術符 スベルカード 其の一

『裁符 リバース・クロース』

クロース=cloth、布地のこと。

リバース=reverse、再誕、つまり再誕する布地ってことですね。

……なんの捻りも無い；

第二十三話 「……ヘンジガナイ。ダケドアリスノヨウダ」

もちろん、元ネタは某RPGのアレ。

第二十四話 「例えば夜になると動き出すとか。水をかけると凶暴になるとか……」

とある映画に出てくるモンスターのことです。

ちと古いけど、もしかしたら、読者の中に知ってる人いるかもしれないですね

第二十五話 「オウ バトルだったな」

「ああ……64の？」

アリスの術符「戦符 リトルレギオン」にて人形がとった陣形のことです

魔理沙たちの言うとおり、オウ バトル64で使えるレギオン陣形が元ネタです。

「ファンネルシフト」「デュアルウェッジ」「ウェッジシフト」「グランドアロー」

他にも、もう少しだけ種類があります。

第二十八話 ピエロの人形

モチーフですが、これは聖剣伝説ROMのゴミ山のピエロの人形を思い出しながら書いていました。

第二十九話 紅葉をあしらった洒落たストラップ

前作『東方紅葉記』参照

第三十話 それは相手がどんな手を出しても絶対に勝つ、じゃんけんにおける最強の一手。

昔こんなの流行りませんでした？w

人差し指を銃みたいに構えて、人差し指と親指でチョキ、中指、薬指、小指でグー。余った手の平でパー。

ちなみに元ネタは魔神英雄伝ワタルです。（あれ、違ったかな……？

第三十一話 「へ？ またグングニ……ぎゃあああああ！？」  
完全にライ・リユートそのもののノリです。

第三十四話 「おまえも、天を貫くような勢いで気張れって！」  
雛ねえちゃんは天 突破しませんよ魔理沙。

第三十六話 あてなの術符 其の二  
『追憶 シグニチャー・キルト』

追憶とは、過去の記憶を思い出すこと。

シグニチャーキルトというのは手芸の技法（主にパッチワーク）のことで、他の人のサインなんかを布地に描いてもらって、その上を作者が刺繍して完成させるキルトのことです。

あてなが過去の思い出を思い返したことで、この術符に一つ一つ思い出が宿ってラストスベルとなった……といった感じです。

ネタはこれぐらいかな？

他にも無意識のうちに混ぜてたりするかもしれませんw

・次回作

実は……少し遅れます。

というのも、まだプロットが出来上がっていません；だから、少し時間が掛かるかもしれないです。

最低でも、今月中には公開できるように頑張ります。

さてさて、最後までお付き合いくださった読者の皆様がた。

お気に入り登録をしてくださった方や、評価してくださった方々。本当にありがとうございます。

読み終わったよ、程度のコメントでも嬉しいので、ぜひ感想を聞かせてください。

次回作でもお付き合いいただけたら嬉しいです。

これからも、未熟な小説家志望のヘタレ、夜斗をどうぞよろしくお願いたします。



くあとがきく Tears of Memories (後書き)

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました！  
次回作でまた会いましょう！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2931q/>

---

Tears of Memories

2011年5月15日04時22分発行